

大阪府茨木市

平成12年度発掘調査概報

平成13年3月

 茨木市教育委員会



溝咋遺跡（その1）調査地全景（西から）



溝咋遺跡（その1）井戸-3（南から）



宿久庄遺跡 中世石積み遺構（西から）



宿久庄遺跡 井戸-2 検出状況（南から）

はじめに

わたしたちのまち茨木市は、昭和23年(1948年)市制を施行して以来、50数年を経た今日では、人口26万を擁する都市に発展してまいりました。JR・阪急電鉄・モノレールや名神高速道路・近畿自動車道・国道171号・中央環状線等が市域を縦貫し、人や物の往来も盛んであり、さらに北部丘陵地域(彩都)の建設が推進され、大きく発展をとげつつあります。

また、バブル崩壊後沈静化しておりました開発の動向も、やや活発化し、法人所有地などが高度利用すべく再開発への方向も見受けられます。

そのような開発に際して、埋蔵文化財の保護の見地から、その記録・保存のため発掘調査を実施しているところでもあります。

この冊子は、平成12年度に行った発掘調査の概要について記録したものであります。

最近では、地方分権化の方向を踏まえ、平成12年には文化財保護法が改正・施行され、都市として埋蔵文化財に関して果たすべき役割もますます重要性を帯びてきています。

もちろん、このような記録・保存が事業主の文化財に対してのご理解とご協力があって始めて可能となることは、申すまでもないところでもあります。

調査にあたり、深いご理解と惜しみのないご協力をいただきましたご関係の皆様へ深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護に、より一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月31日

茨木市教育委員会
教育長 村山和一

目 次

はじめに

例 言	1
茨木市内遺跡分布図	2
平成12年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	3
1. 宿久庄遺跡（藤の里一丁目）	4
2. 宿久庄遺跡（藤の里二丁目）	14
3. 中条小学校遺跡（駅前三丁目）	18
4. 溝咋遺跡（五十鈴町）	20
5. 茨木遺跡（大手町）	24
6. 溝咋遺跡（五十鈴町）	26
7. 春日遺跡（春日一丁目）	31
8. 常楽寺跡（蔵垣内三丁目）	33
9. 中条小学校遺跡（東中条町）	35
10. 鼻摺古墳（耳原三丁目）	38

図 目 次

第1図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅰ（1～73土師器Ⅲ）	第14図 溝咋遺跡 出土遺物実測図Ⅱ（11羽釜 12甕 13～14下駄）
第2図 宿久庄遺跡 遺構平面図	第15図 茨木遺跡 遺構平面図
第3図 宿久庄遺跡 SE-02 平面実測図・立断面図	第16図 溝咋遺跡（その2） 出土土器実測図Ⅰ（1～3土師Ⅲ 4～6瓦器Ⅲ 7青白磁Ⅲ 8～15瓦器Ⅲ 16～21壺 22甕蓋 23甕）
第4図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅱ（74～80瓦器Ⅲ 81～113瓦器Ⅲ）	第17図 溝咋遺跡（その2） 出土土器実測図Ⅱ（24～28・35甕 29～30鉢 31～32壺 33～34無文系土器）
第5図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅲ（114～146瓦器Ⅲ）	第18図 溝咋遺跡（その2） 調査区西部下層遺構平面図
第6図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅳ（147青磁合子蓋 148～157青磁碗 158～167東播系須恵器捏鉢）	第19図 溝咋遺跡（その2） 遺構平面図
第7図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅴ（168～178羽釜 179～180砥石）	第20図 春日遺跡 遺構平面図
第8図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅵ（181～183土塼 184～186石塼 187～190甕）	第21図 常楽寺跡 遺構平面図
第9図 宿久庄遺跡 遺構平面図	第22図 中条小学校遺跡 遺構平面図
第10図 中条小学校遺跡 遺構平面図	第23図 鼻摺古墳 墳丘測量図
第11図 溝咋遺跡（その1） SE-03（中央部下層）平面実測図・立断面図	第24図 鼻摺古墳 SX-1堆積状況土層断面図
第12図 溝咋遺跡（その1） 遺構平面図	第25図 鼻摺古墳 調査区西壁土層断面図
第13図 溝咋遺跡 出土遺物実測図Ⅰ（1～4土師器Ⅲ 5～8瓦器 9緑釉陶器 10播鉢）	第26図 鼻摺古墳 遺構平面図
第14図 溝咋遺跡 出土遺物実測図Ⅱ（11羽釜 12甕 13～14下駄）	第27図 鼻摺古墳 SK-1出土土器実測図

例 言

1. この概報は、茨木市教育委員会が平成12年度に実施した発掘調査事業報告です。
2. 平成12年度に実施した発掘調査に関しては、下記の方々のご協力とご指導・ご教示によるもので期して感謝の意を表します。
森岡 秀人（芦屋市教育委員会） 辻 康男（芦屋市教育委員会）
古川 久雄（摂陽文化財調査研究所） 免山 篤（元茨木市文化財保護審議会委員）
濱田 延充（寝屋川市教育委員会） 鈴木 雅美（大阪府文化財調査研究センター）
3. 本書に使用した地図は「国土地理院－1/25,000高槻・吹田」・「茨木市地域計画図－1/2,500」である。

平成12年度 埋蔵文化財発掘調査事業の概要

1. 平成12年度発掘調査事業

茨木市における平成12年度の発掘件数は9件で、埋蔵文化財確認試掘・立会調査件数は180件ありました。発掘調査原因の事業別件数は、民間事業5件、公共事業4件でした。

公共事業は、道路・細街路敷設事業、消防用貯水槽設置などで、民間事業では教会の建替、共同住宅、マンション建設工事や倉庫の新築・立替工事、店舗建設などでした。

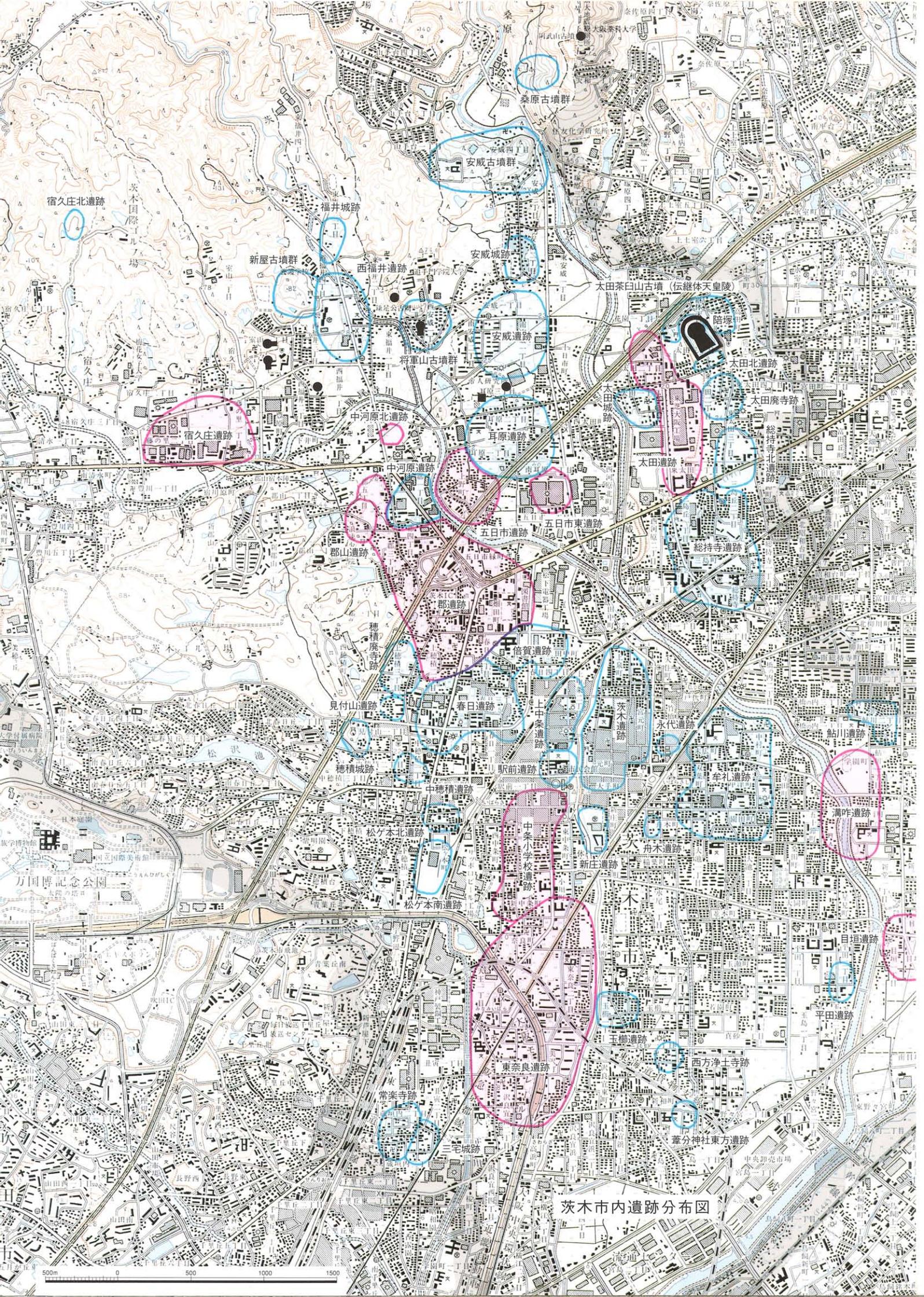
発掘調査件数は前年と比較して6件減少していますが、埋蔵文化財確認試掘・立会調査件数は例年よりやや多く、今後も社宅の廃止や田畑の用地転換などによる共同住宅開発、市内の空地の開発や古いマンションの立替等が進む傾向が続くものと思われます。

2. 平成12年度発掘調査における概要

平成12年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、注目したい調査としては、溝昨遺跡^{はなずり}と鼻摺古墳の調査があげられます。溝昨遺跡は、文献資料においては「溝昨(杭)荘」として登場します。特に、上皇・法皇の直営荘園である「長講堂領」として「溝昨(杭)荘」が記録されており、鎌倉時代になると溝杭源氏^{みぞくいげんじ}の治める荘園として「溝杭荘」の名前がでてきます。

しかしながら、これまでの発掘調査では文献上で書かれた平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡が見つかっておらず、所在が判らなかつたものです。今回の発掘調査において平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡の一端が初めて検出されました。

鼻摺古墳は昭和35年に大阪市立美術館と茨木市教育委員会と合同で発掘調査が実施されて以来、41年振りに発掘調査が実施されました。細街路になる部分の細長いトレンチ調査でしたが、周濠と考えられる落ち込みと古墳築造以前の弥生時代中期の遺構が検出され、南側に広がる耳原遺跡との関係を考える資料を得ることができました。



茨木市内遺跡分布図



平成12年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

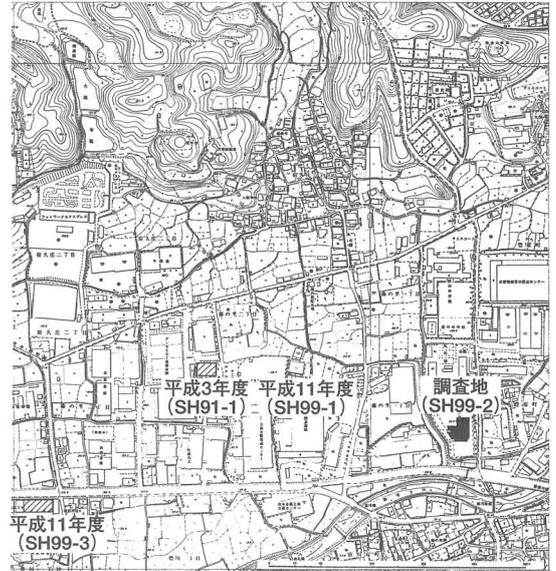
No.	遺跡名	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容	調査原因
1	宿久庄遺跡	藤の里一丁目 171-1他	11.10.14～11.12.18	4,000㎡	弥生時代～古墳時代 中世～近世 弥生土器・土師器 須恵器・陶磁器 掘立柱建物・井戸 石積み遺構・水田跡 土塚・柱穴	店舗建設
2	宿久庄遺跡	藤の里二丁目 443-1他	12.2.21～12.3.31	1,972㎡	飛鳥 土師器・須恵器	倉庫建設
3	中条小学校遺跡	駅前三丁目 422・429-2	12.5.8～12.6.5	330㎡	弥生時代・古墳時代 平安時代 石器・弥生土器 土師器・須恵器 黒色土器 溝・土塚・柱穴	教会建設
4	溝咋遺跡(その1)	五十鈴町地内	12.6.26～12.8.18	392㎡	平安時代～近世 土師器・須恵器 陶磁器・木製品 緑釉陶器片 井戸・土塚・柱穴	道路
5	茨木遺跡	大手町 1621-1	12.7.13～12.7.28	130㎡	中世～近世 柱穴 土師器・須恵器・瓦器 陶器・染付・瓦	共同住宅建設
6	溝咋遺跡(その2)	五十鈴町地内	12.9.1～12.11.30	506㎡	弥生時代～古墳時代 平安時代～中世～近世 弥生土器 土師器・須恵器 陶磁器・自然流路 溝・土塚・柱穴 近世土手跡 近世井戸	道路
7	春日遺跡	春日一丁目 72-8他	12.9.1～12.9.14	255㎡	平安時代～中世 土師器・須恵器 瓦器・黒色土器 溝・土塚・柱穴	共同住宅建設
8	常楽寺跡	蔵垣内三丁目地内	12.9.21～12.9.29	64㎡	弥生時代～古墳時代 柱穴	消防用貯水槽 建設
9	中条小学校遺跡	東中条町 985-2他	12.11.9～12.12.27	700㎡	弥生時代～古墳時代 弥生土器 土師器・須恵器 方形周溝墓 竪穴住居・井戸 土塚・柱穴	共同住宅建設
10	鼻摺古墳	耳原三丁目 10	12.1.10～13.1.30	250㎡	弥生時代 弥生土器 土塚・落ち込み	細街路

宿久庄遺跡

所在地 茨木市藤の里一丁目171-1他
開発事業 大型店舗建設事業
調査期間 平成11年10月14日～平成11年12月18日
調査面積 4,000m²
調査担当 濱野 俊一

調査結果

宿久庄遺跡は市域の北西部、勝尾寺川の左岸に位置しており、藤の里二丁目から一丁目にかけて広がる集落遺跡である。宿久庄遺跡の発見は、昭和50年府道茨木～能勢線の拡幅工事に伴って行われた発掘調査による。発掘調査の結果、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物と遺構が検出された。以後、何度かの発掘調査が実施され、宿久庄遺跡が弥生時代後期から中・近世に及ぶ複合遺跡であることが判明している。しかしながら、宿久庄遺跡における大規模な発掘調査は、藤の里二丁目に所在する三菱倉庫(株)を中心とする一帯に限られており、遺跡の規模や性格については不明な点が多い。昭和59年度以降の、三菱倉庫(株)や大成化工(株)敷地内においての発掘調査では古墳時代後期の土塚や柱穴が検出されている。特に、平成3年度に実施されたグンゼ株式会社の敷地内での発掘調査では平安時代後期から中世にかけての堀立柱建物6棟と柵列や土塚そして古墳時代後期の堀立柱建物1棟と落ち込みと溝や土塚が検出されている。また、宿久庄高松において採土中に奈良時代の蔵骨器が単独出土している。今回の調査地点は、昭和60年度に発掘調査を実施した藤の里一丁目



に所在する北大阪生協発掘調査地点より、東側にあたり、周知の遺跡の範囲外であった。

今回の調査地点は、以前はゴルフセンターであった。今回、当該地において大型店舗建設に伴って試掘調査を実施した。試掘調査は練習場を中心に試掘杭を設定して断面観察を中心に実施した。試掘調査の結果、敷地の中央部を中心に、中世を主体とする遺物包含層が確認された。

このため、本調査は、建物建築部分が第1調査区、駐車場出入口南側部分を第2調査区、駐車場出入口北側部分を第3調査区の3調査区を設定して順次、調査を実施することとなった。

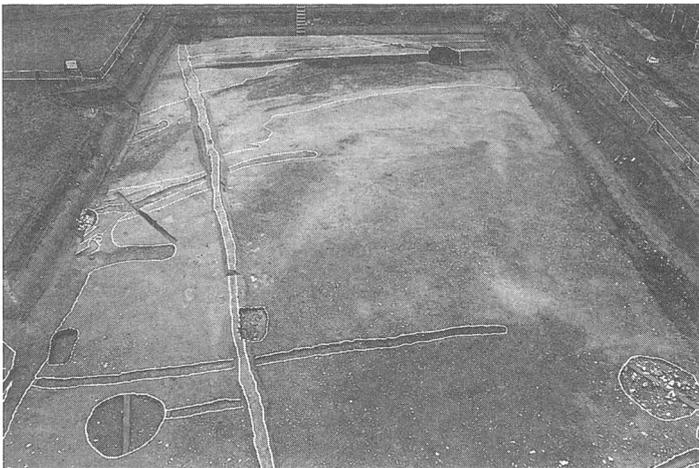
当該地は全体的に中世以前は勝尾寺川の旧流路にあたっており、堆積層序は場所によって複雑に変化している。しかしながら、中世以後は集落や水田が営まれており比較的安定した土地に変化している。このため中世以降の土層は大きくは変化しない。基本層序としては盛土層・近世水田層・床土層直下に灰褐色砂質土を主体とする平均3層以上の中・近世水田層が敷地の東側において、そして、敷地の西側で暗茶褐色砂質土を主体とする中世遺物包含層と中世集落面が検出されている。検出した遺構としては、中世段階は、石積み遺構(SX-01)1基、井戸2基、大形土塚4基と堀立柱建物が少なく見積もって8棟程確認した。また、柱穴多数と溝、土塚が検出されている。

近世段階は、調査区北端で検出された東西溝1条と井戸1基そして水田に伴う大畦畔^{けいはん}が検出されている。

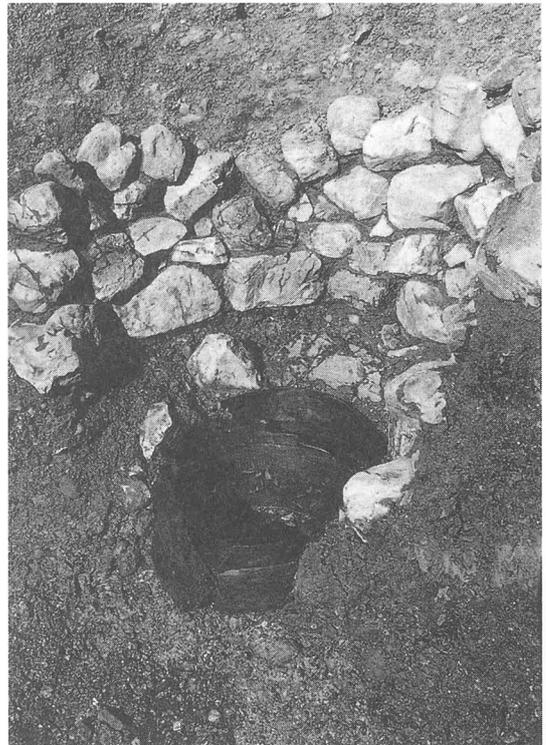
出土遺物としては中世の土師器、須恵器、瓦器等を主体とし、輸入陶磁器の青磁、白磁が出土している。特に、石積み遺構・井戸・大型土塚からは瓦器碗、土師皿、東播系須恵器の捏鉢^{こねばち}・甕、瓦質の三足塙^{さんそくなべ}や常滑焼の甕等の土器類や漆碗等の日常雑器が多数出土している。また、検出された井戸は石組みで井戸底には曲物^{まげもの}を設置していた。また、滑石製石鍋なども出土している。

まとめ

宿久庄の土地は、奈良時代の律令期には嶋下郡^{しましもぐん}の四郷のうち宿人(久)郷^{しゆくくごう}として、そして中世前半には荘園として中宮式領宿久庄^{ちゆうぐうしきりょうしゆくくのしやう}そして中世末期の戦国時代には宿久城^{しゆくくじやう}としてたびたび文献上に登場している。今回の調査で検出された遺構としては、中世前半を中心とする集落の一端が検出された。出土遺物からは、13世紀後半から14世紀にかけての遺物が多く、鎌倉時代後半の荘園の姿を垣間見せてくれた。特に、石積み遺構は、掘削法面^{のりめん}の肩部分に勝尾寺川から採取された人頭大の河原石を丁寧に積んでいた。遺構としての性格は、全体の半分が調査区外に延びているため判然としないが、園池^{えんち}または水田に伴う集水施設の可能性が考えられる。



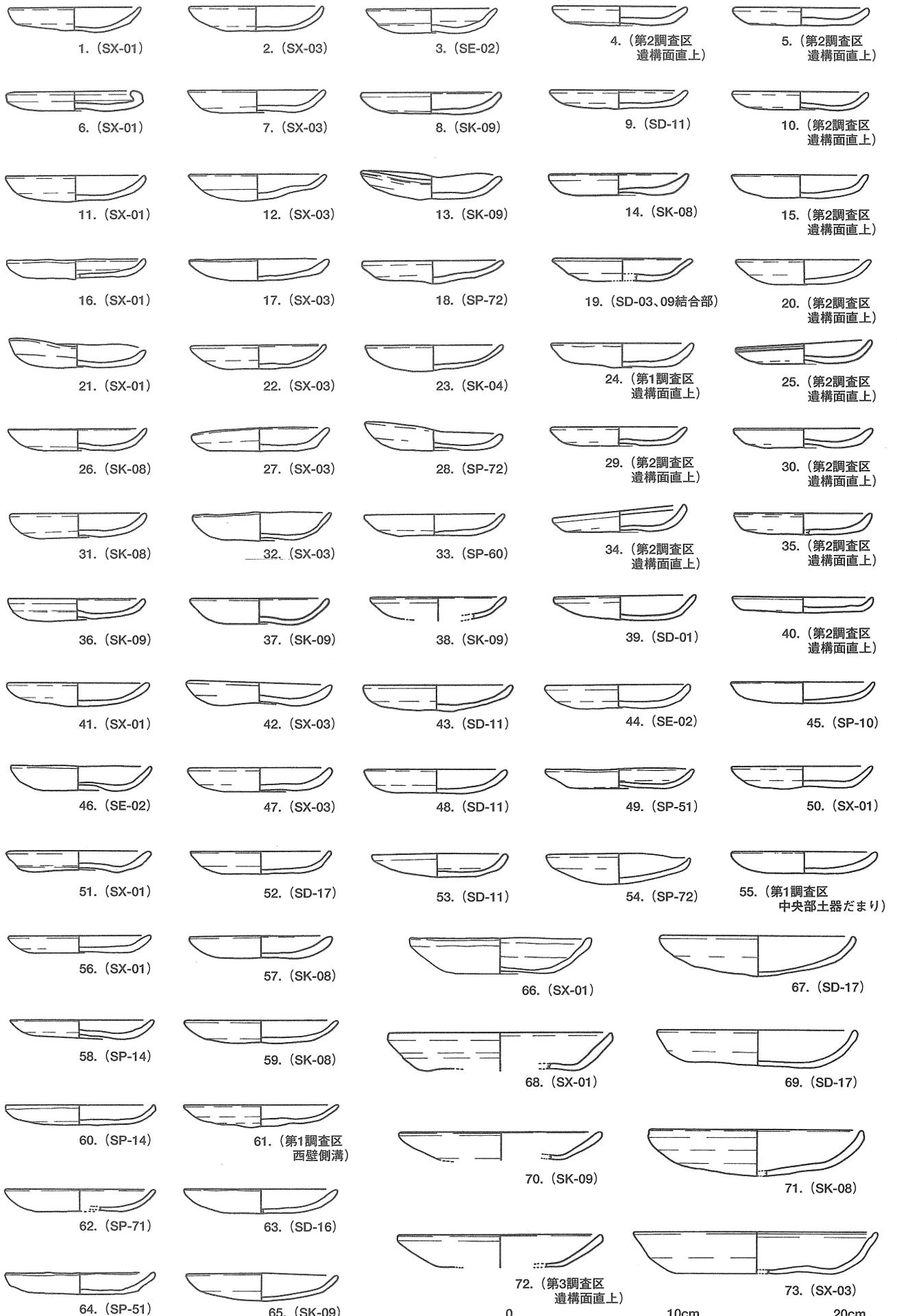
第1調査区全景(南から)



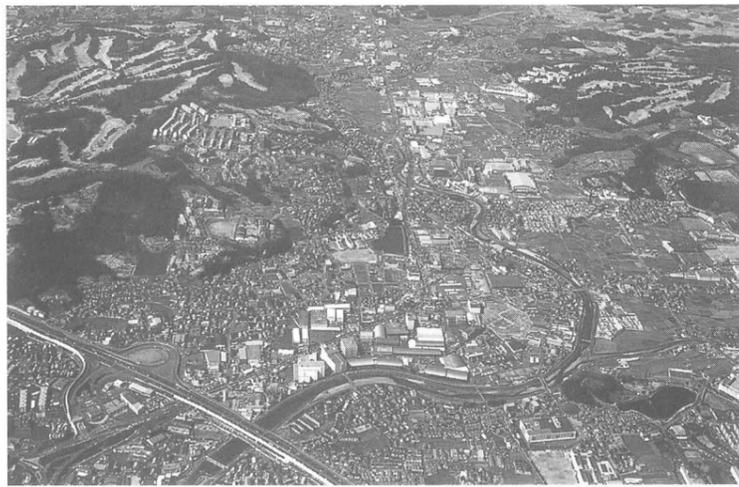
第3調査区 井戸2 断ち割り状況(南から)



第3調査区全景(南から)



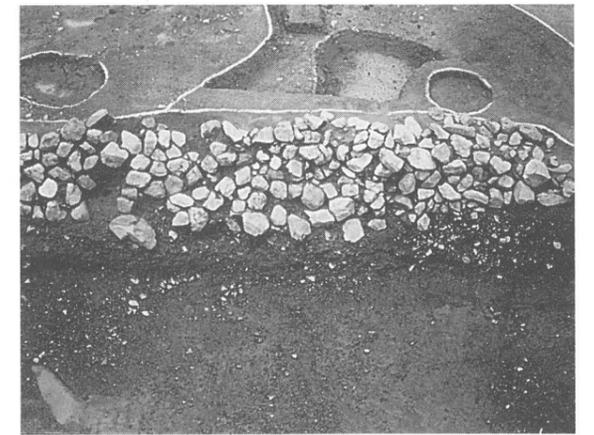
第1図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅰ(1~73土師器Ⅲ)



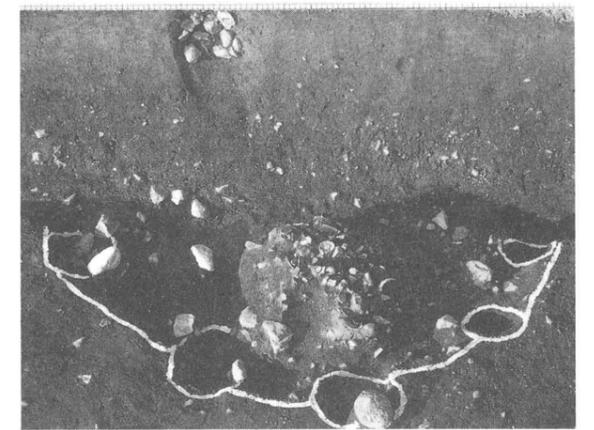
宿久庄遺跡周辺航空写真（東から）



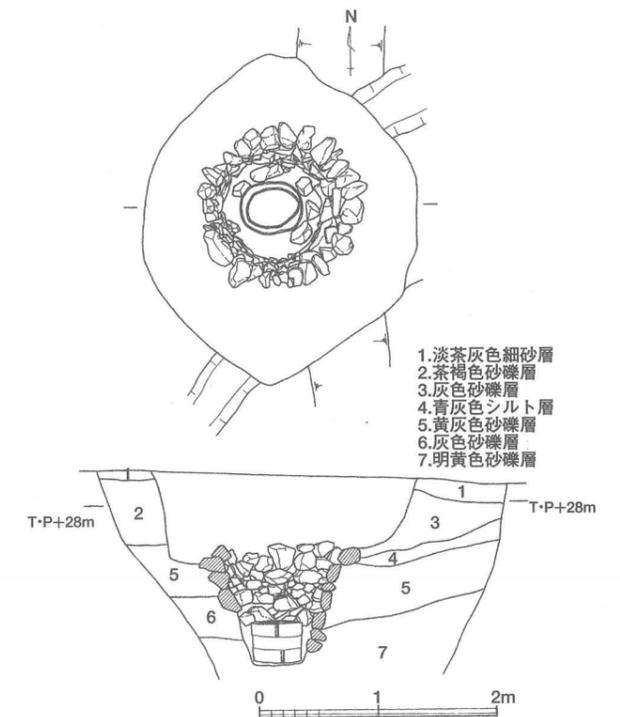
第2図 宿久庄遺跡 遺構平面図



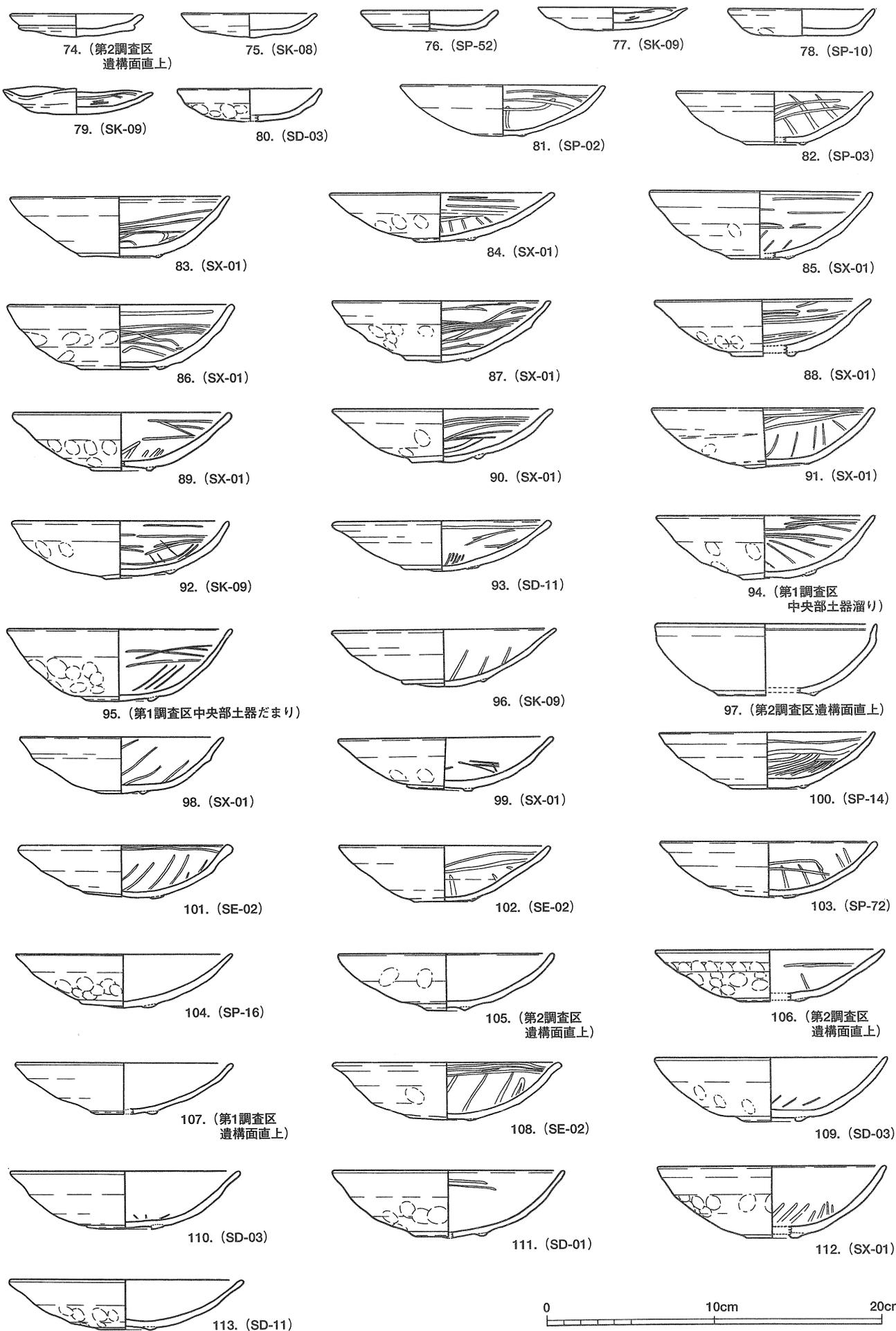
宿久庄遺跡 石積み遺構 (SX-01) (西から)



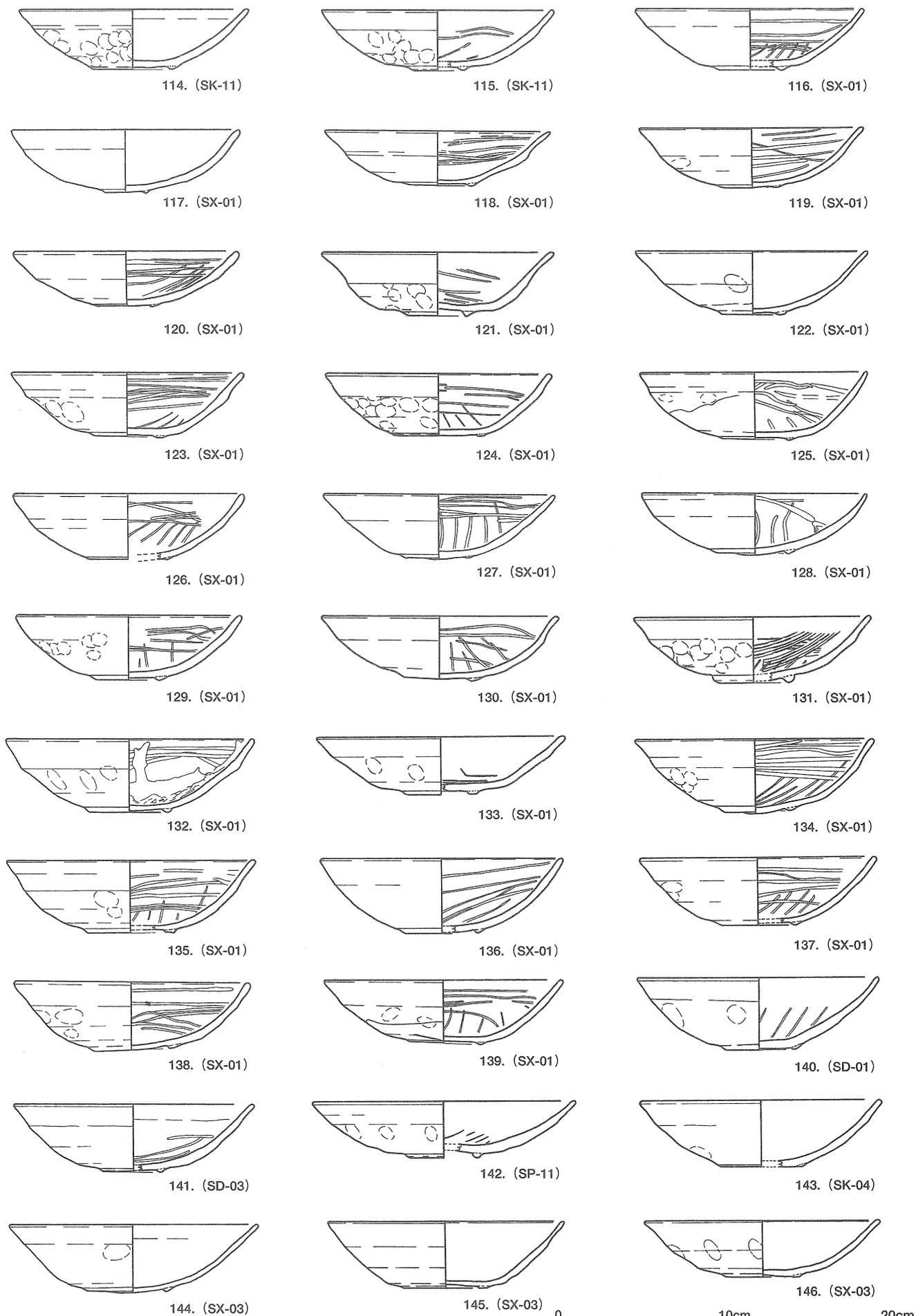
宿久庄遺跡 大形土塚 (SK-09) 南半部 (南から)



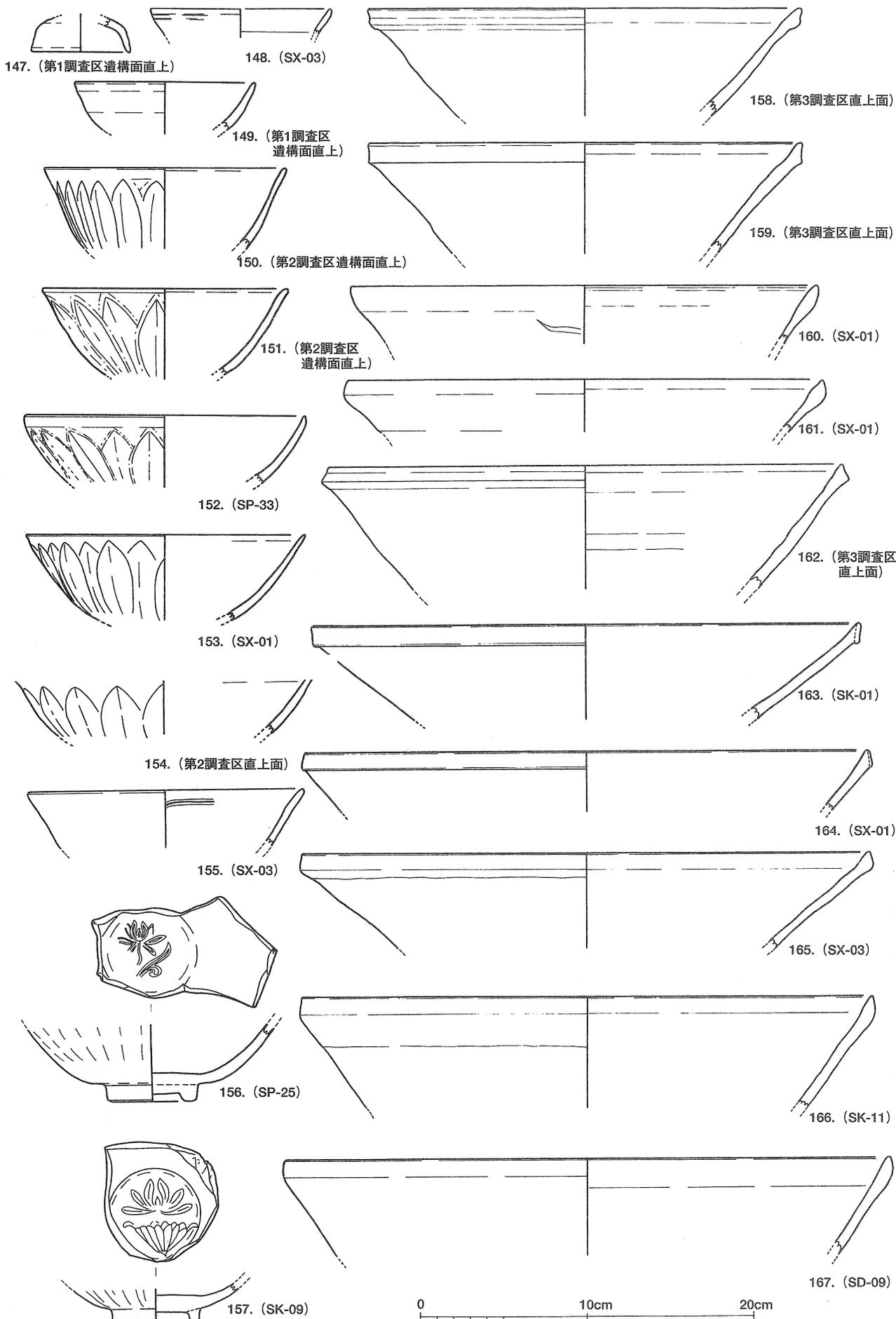
第3図 宿久庄遺跡 井戸-2 (SE-02) 平面実測図・立断面図



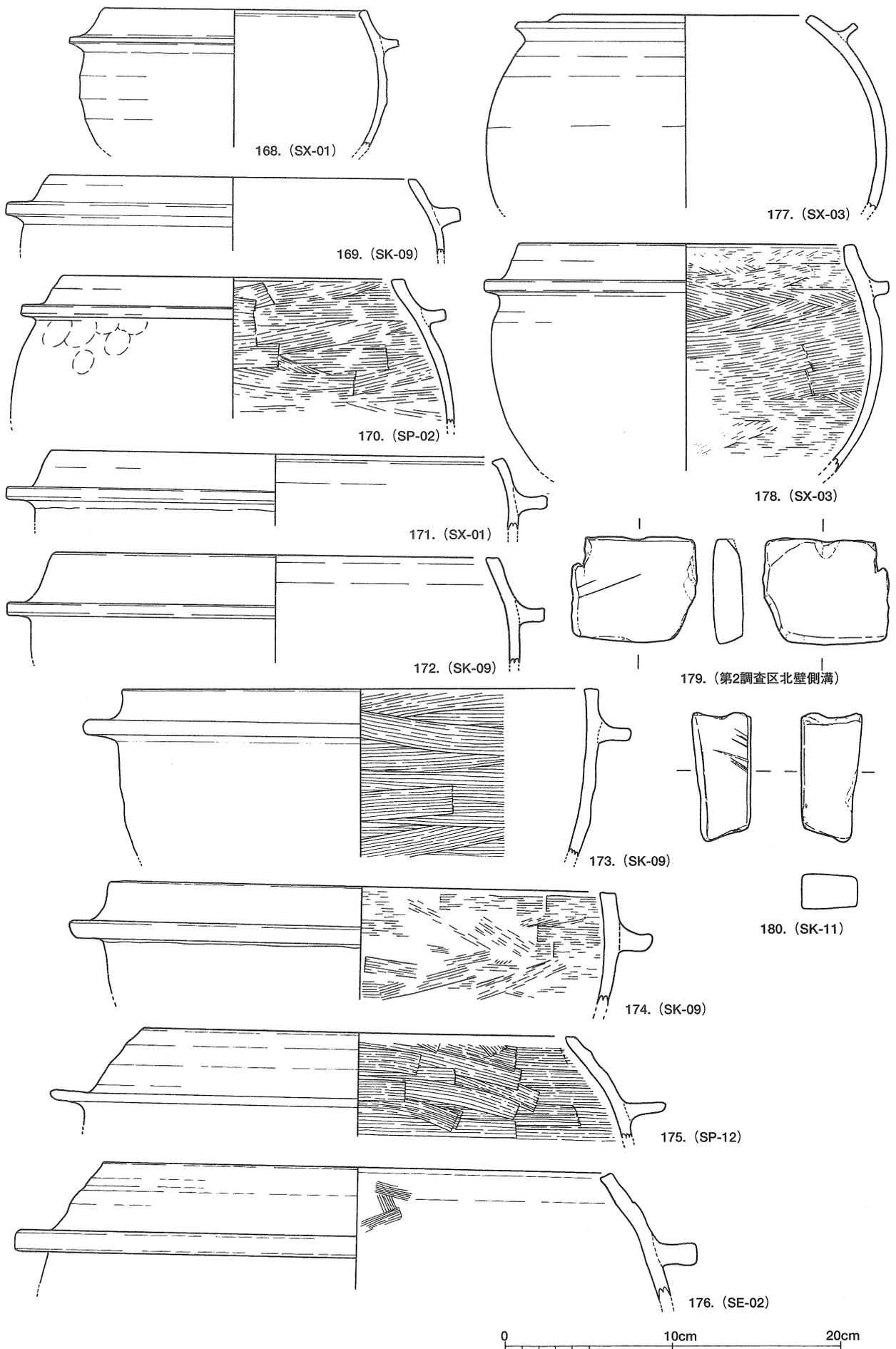
第4図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅱ (74~80瓦器皿 81~113瓦器碗)



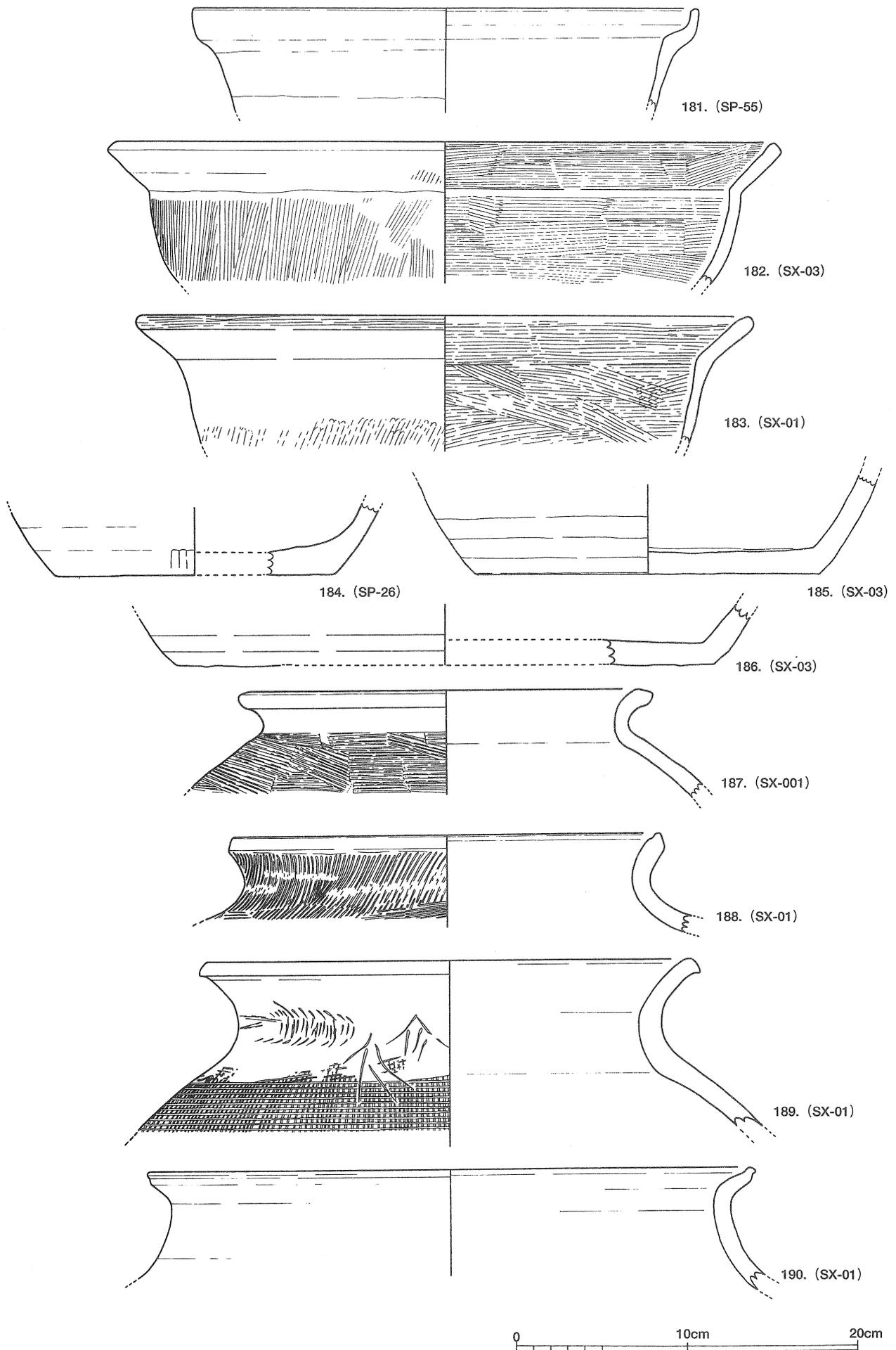
第5図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅲ(114~146瓦器碗)



第6図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅳ (147青磁合子蓋 148~157青磁碗 158~167東播系須恵器捏鉢)



第7図 宿久庄遺跡 出土土器実測図V (168~178羽釜 179~180砥石)



第 8 図 宿久庄遺跡 出土土器実測図Ⅵ (181~183土壺184~186石壺187~190甕)

宿久庄遺跡

所在地 茨木市藤の里一丁目443-1他
開発事業 倉庫建設事業
調査期間 平成12年2月21日～平成13年3月31日
調査面積 1,972m²
調査担当 宮脇 薫

調査結果

宿久庄遺跡は、茨木市のほぼ中央部に位置しており、市域の北半を占める老の坂山地の山麓に所在している。西には勝尾寺川が北から南へ大きく蛇行しながら流れていて、右岸には宿久庄西遺跡、栗生間谷遺跡がある。また、東の山麓部には紫金山古墳、南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳及び新屋古墳群があり、また、縄文時代晩期から奈良・平安時代の複合遺跡の西福井遺跡

がある。南は東西に西国街道が通っており、昭和57年頃からこの地域では継続的ながら発掘調査が続けられている。その結果、この宿久庄遺跡では堀立柱建物、井戸、水田跡等が検出しており、弥生時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。

調査地は以前倉庫があった部分も含まれており、現地表面から2m～3.5mまでは造成土・耕土及び明黄色土(床土)である。その下層に古墳時代から飛鳥時代の遺物を含む淡褐色土の包含層が25～30cm堆積している。遺構はこの包含層の下、標高37.7mから36.2m付近で検出した。

検出遺構

遺構の検出面は、北が高く南が低くなっており、南北で、1.5mの高低差がある。

今回の調査で検出された遺構は、溝、土壇、井戸、柱穴跡である。

溝-1

調査区の南を東西に横断する形で検出された。大きく削平されており、検出面での幅は1.15m～2.7mで、深さは15～45cmである。

溝の堆積は褐色土の単一層である。溝内より、6世紀後半の須恵器及び土師器が出土している。

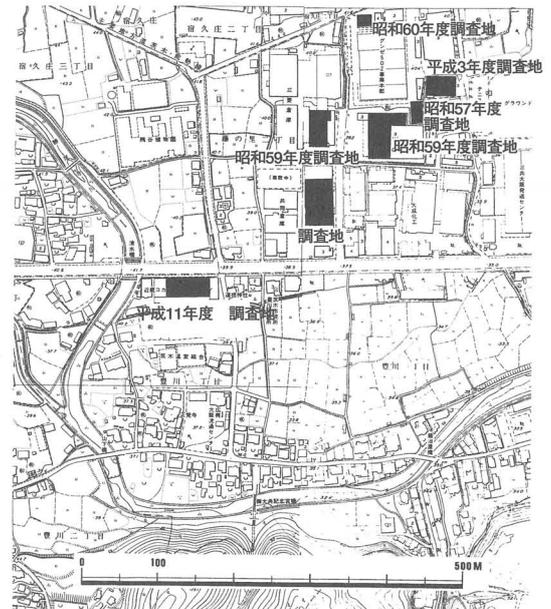
溝-2

調査区の中央部で途切れた状態で検出された。幅は1.3mで、深さは25～35cmで底面は舟底状になっている。

溝の堆積は包含層と同じ淡褐色土である。溝内より、6世紀後半～7世紀前半の土師器及び須恵器が出土している。

溝-3

溝-2と同じく途切れた状態で検出された。幅は1.55m、深さは15～20cmで底面が舟底状になっている。



溝の堆積は包含層と同じ淡褐色土である。溝内より、6世紀後半～7世紀前半の土師器及び須恵器が出土している。

井戸-1

調査区の南で検出された。径は約50cmで地山の礫層の下層の砂層まで掘られている。遺物は出土しなかった。

土塚-1

調査区の中央部の東で検出された。長径が2.6m、短径1.6mのややゆがんだ楕円形で、深さは90cmである。

土塚の堆積は淡褐色土が堆積している。7世紀前半の須恵器の高坏、杯身・蓋が各1個体及び土師器の皿が1個体が底から遊離した状態で出土した。

土塚-2

土塚-1の北に隣接して検出された。平面の長径が1.7m、短径が1.3mの楕円形で、深さが30cmである。

土塚内は、焼土及び灰が混じった淡褐色土が堆積している。しかし、土塚の壁面及び底は火熱痕跡を受けていないところから、炉・かまど等からかきだされる灰などの遺棄塚ではないかと考えられる。遺物は7世紀前半の土師器及び須恵器が出土している。

土塚-3

径が1.35mのほぼ円形で、深さが70cmである。埋土は、淡褐色土で7世紀前半の須恵器が出土している。

土塚-4

長径が1m40cm、短径が90cmのやや変形した楕円形で深さが40cmである。

掘立柱建物-1

4間×5間の掘立柱建物で西側に庇状の張りだしがある。柱穴の直径は20～30cm前後と小さい。柱穴から遺物は出土しているが細片のため時期は不明である。

掘立柱建物-2

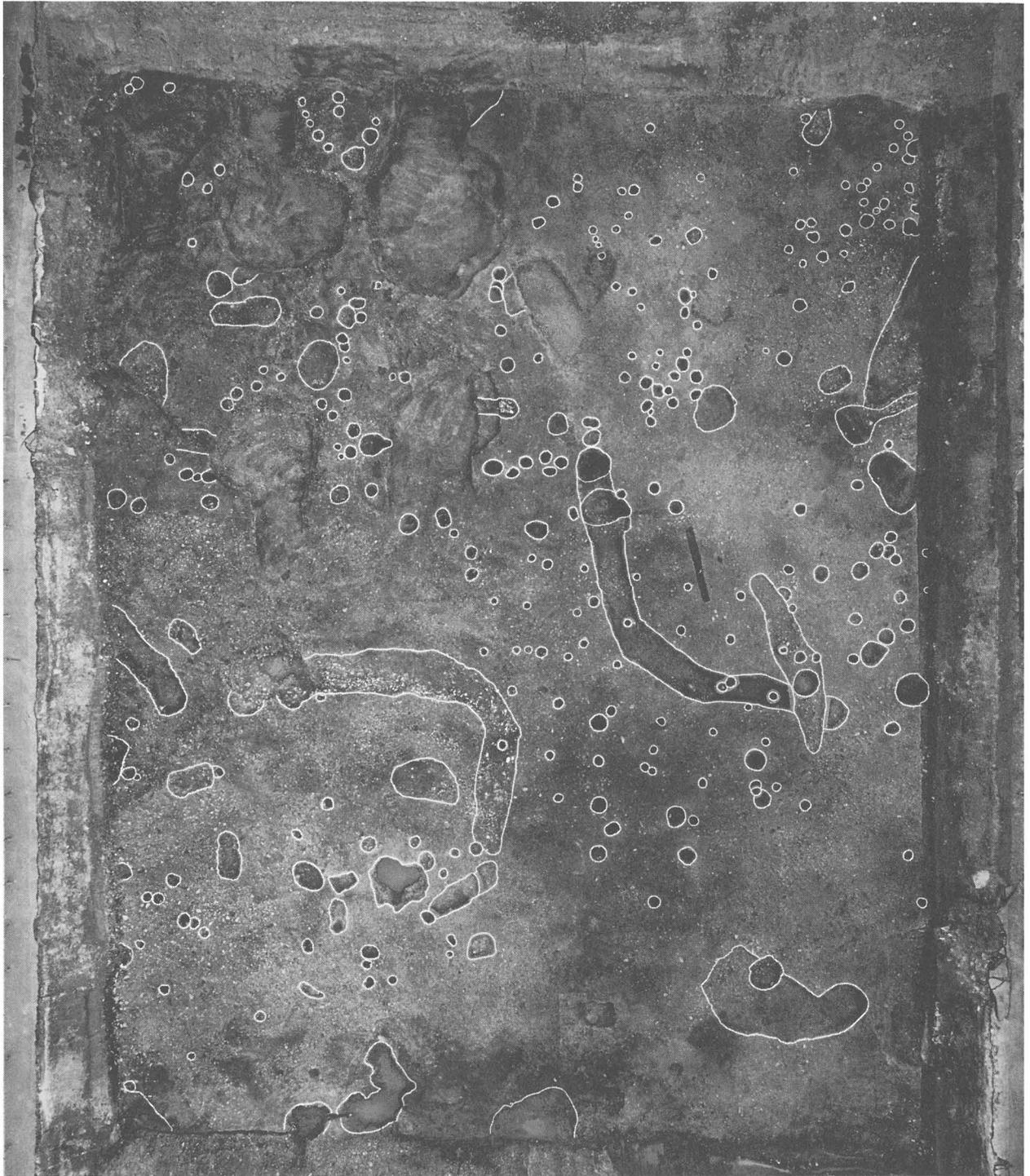
2間×2間以上の掘立柱建物で調査地の中央部東端で検出された。大半が調査区外に延びるため規模は不明である。

柱穴

調査区全域で柱穴を確認することができた。径が20～30cm、30～45cmのものに分けられる。また柵列と推定される一列に並ぶ柱穴を確認した。しかしながら、遺物が出土する柱穴があるものの、大半が細片で、出土遺物と柱穴の規模では時期を分けることができなかった。

まとめ

今回の調査によって、7世紀前半の集落の一部が認められたが、柱跡の規模や遺物・遺構の濃密度から、一般的な集落と考えられる。今後、今回の調査を含めいままでの調査結果を検討して集落の移動などの問題を考えていかなければならない。



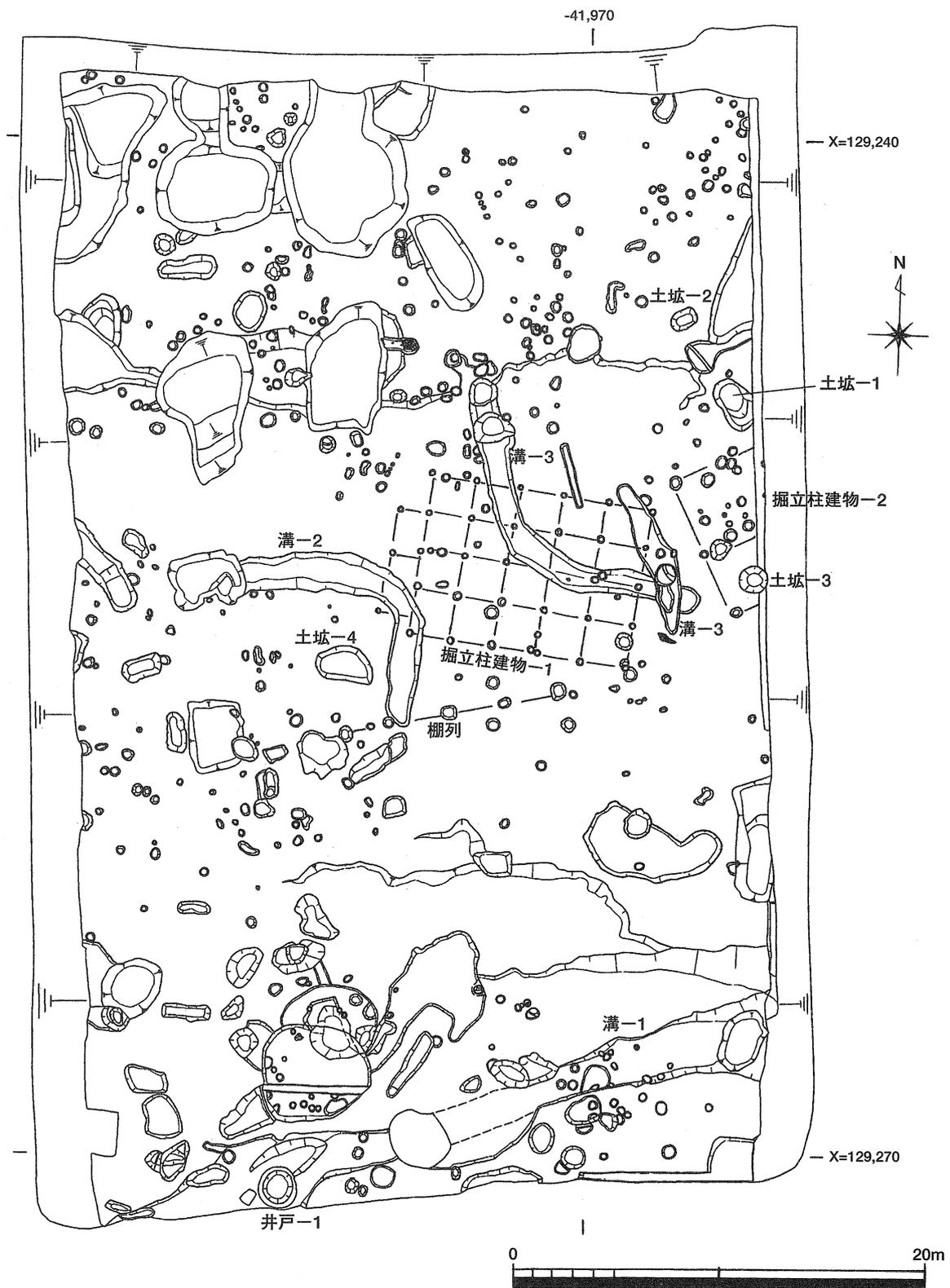
宿久庄遺跡 調査地全景写真



宿久庄遺跡 調査区南部遺構検出状況(西から)



宿久庄遺跡 調査区南西部遺構検出状況(西から)



第9図 宿久庄遺跡 遺構平面図

中条小学校遺跡

所在地 茨木市駅前三丁目422他
調査原因 教会建設事業
調査期間 平成12年5月8日～6月5日
調査面積 330m²
調査担当 中東 正之
調査結果

調査地は、弥生時代中期から中世の複合遺跡である、中条小学校遺跡の包蔵範囲の北端に位置する。当知周辺の既往の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭頃(庄内併行期)を主体とする遺構・遺物が検出されている。

平成12年3月に試掘調査を実施したところ、包含層・遺構を確認した為、建築予定範囲を対象に、本発掘調査を実施した。

基本層序は、上層より、現代盛土(40～70cm)、旧耕土(10～20cm)、灰黄色土(5～20cm中世包含層)、黒褐色粘質土(0～5cm弥生時代後期から古墳時代前期初頭の包含層)、明黄褐色粘質土(地山層)となる。遺構検出は地山層上面で実施した。

検出遺構は、溝・溝状遺構22条、掘立柱建物3棟、土壇15基、柱穴200個以上を数える。時期は、弥生時代後期から中世におよぶが、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭(庄内併行期)に比定されるものが主体となる。平安時代前期のものとして土壇1と柱穴約20個、中世のものとして土壇・柱穴50数個がある。

庄内併行期の主要な遺構としては、掘立柱建物がある。掘立柱建物1と3は1×2間、掘立柱建物3は1×3間で、掘立柱建物1と3は棟を揃える。さらに数棟の成立が想定される。また、調査区東部の隅丸形状に廻る溝群は、方形周溝墓の痕跡である可能性もあるが、大半が調査区外に至るため、全容は不明である。

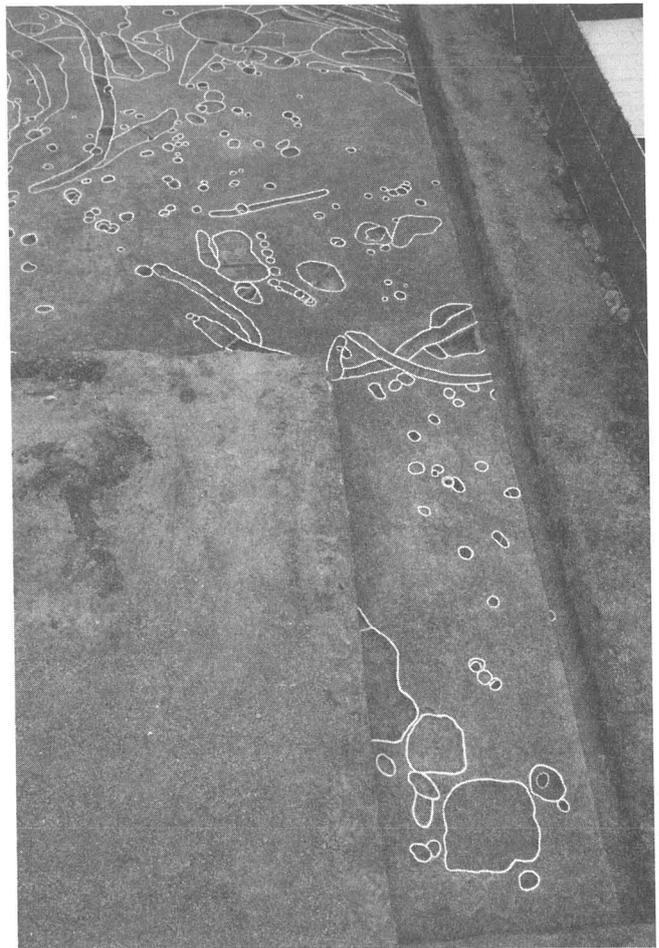
出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器A類、石鏃、砥石などがある。土器類はほとんどが摩滅した細片ながら、古墳時代前期初頭(庄内併行期)の古い段階を示すものが多いと判断される。黒色土器は、土壇1から出土したもので、10世紀頃のものとして判断される。本遺跡内で遺構に伴う出土は初例である。遺物総量は、整理箱で5箱である。

調査の結果、当地では、弥生時代後期から平安時代前期頃の居住域、中世遺構などが検出された。主体となる時期は古墳時代前期初頭(庄内併行期)と判断される。この時期に本遺跡の範囲が最大に広がったが、もしくは北側に中心部を移したものと考えられる。中世に至っては、農地へと改変されていったものとみられる。

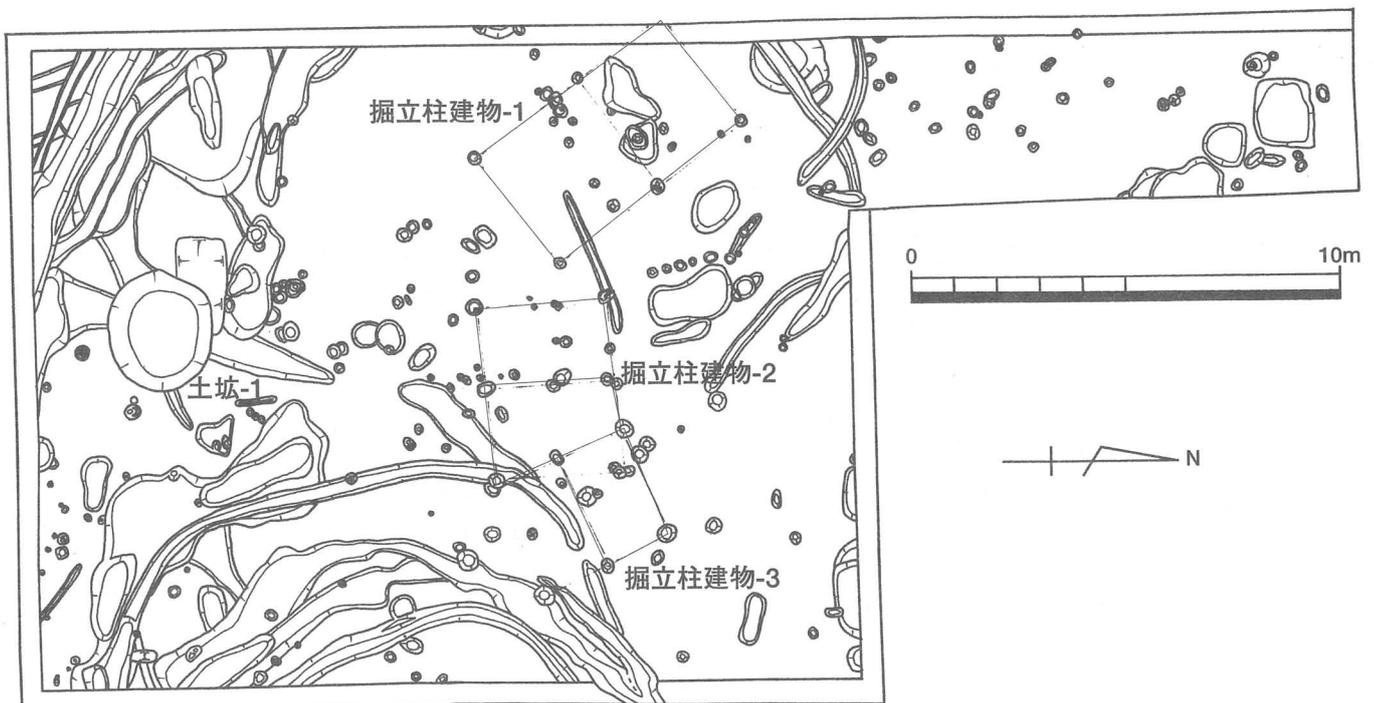




中条小学校遺跡 調査区南部全景（北から）



中条小学校遺跡 調査区北部全景（北から）



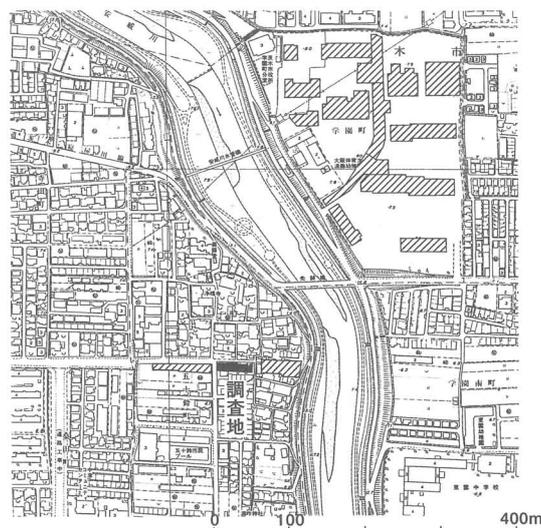
第10図 中条小学校遺跡 遺構平面図

溝 昨 遺 跡 (そ の 1)

所在地 茨木市五十鈴町地内
開発事業 市道敷設事業
調査期間 平成12年6月26日～平成12年8月18日
調査面積 392m²
調査担当 濱野 俊一

調査結果

溝昨遺跡は市域の東部、安威川を挟んで位置しており、五十鈴町、学園町、学園南町、新堂にかけて広がる集落遺跡である。遺跡の範囲は東西250m、南北500mに広がる。溝昨遺跡については、戦前から安威川付近で遺物が採集されていたが、昭和32年安威川の河川改修



工事に伴って先鋒橋付近から瓦器碗が出土したことが遺跡発見の端緒である。その後、長らく、大規模な発掘調査が実施されていなかったが、平成7年から平成11年にかけて実施された大阪体育大学(浪商学園)跡地⁽¹⁾において住宅都市基盤整備公団の大規模集合住宅建設工事に伴って(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施している。調査の結果、弥生時代前期から中世・近世までの遺構と遺物が検出された。主要な遺構としては弥生時代後期の土器棺や古墳時代前期の竪穴住居跡・井戸・溝・土塚等が、そして古墳時代前期から近世にかけての水田跡が検出されている。また、溝昨神社上宮跡が検出され中世まで創建が溯ることが判明している。遺物としては、銅釧・人面線刻土器などが出土している。特に、古墳時代前期の関東・東海・山陰・瀬戸内地域などの外来系土器が多数出土していることは注目される。

⁽²⁾ 溝昨遺跡は、文献資料上にたびたび登場する溝昨(杭)庄にあたる。15世紀初めの応永14年の『長^{おうえい}講堂領目六^{ちよう}』に「^{ちようぶん}宍分、^{せつ}撰津国^{こくみぞくいのしやうねんぐ}溝杭庄年貢未定」とみえ、『^{そん}尊卑分脈^{ぶんみやく}』には溝杭源氏の祖・資兼^{すけかね}の時には「^{ほかのいえ}外家の所領を相伝するに依って、^{しりょう}撰津国^{そうでん}溝杭^よに住し、^{じゅう}溝杭大夫^{みぞくいたいふ}」と称したことが記述されている。この様に文献資料上に登場する溝昨(杭)庄は11世紀ごろには成立していたと考えられてきた。平成6年度に溝昨遺跡南東端の新堂一丁目において小規模なトレンチ調査によって平安時代後期から鎌倉時代の黒色土器B類の碗や瓦器碗が出土している以外は、まったく当該期の集落は検出されていなかった。

当該地は、調査以前は木造個人住宅が密集していたが、用地買収後は住宅は解体され裸地になっている。調査は、車道予定部分に東西に長い調査区を設定した。基本層序としては盛土層・近世水田層・床土層直下にシルト系の土質を主体とする平均3層以上の中～近世の包含層が堆積している。遺構は各堆積層から切り込んだ複数の時代の遺構が確認されたが、最終面にて一括検出作業をおこなった。以下、検出遺構について記述する。近世段階の遺構としては、長方形土塚が3基、井戸または肥え溜め2基、大型土塚1基と敷地を区画する南北溝等が検出されている。

敷地を区画する南北溝を挟んで東側において近世段階の遺構が集中して検出されている。特に、大形土塚はゴミ捨て穴と推定でき、中からは、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・伊万里焼等の陶磁器類や下駄等の木製品やシジミなどの貝類等の食物残滓が出土している。調査区の東側には、江戸時代の庄屋クラスの屋敷地が存在していたものと思われる。

中世段階の遺構としては、ほとんどが調査区外に延びるため、棟数は不明だが、数棟は確実に復元できそうな掘立柱建物の柱穴が多数と井戸(SE-03)・溝・土塚等が検出されている。

特に、井戸(SE-03)は、曲物が上段目が5個、中段目が6個、下段目に4個の合計15個そして一番底には底部を打ち欠いた羽釜が設置されていた。そして中段目あたりで、上部を打ち欠いて底部のみ東播系須恵器の甕が出土しており、釣瓶としては大きすぎるので、井戸蓋の可能性はある。

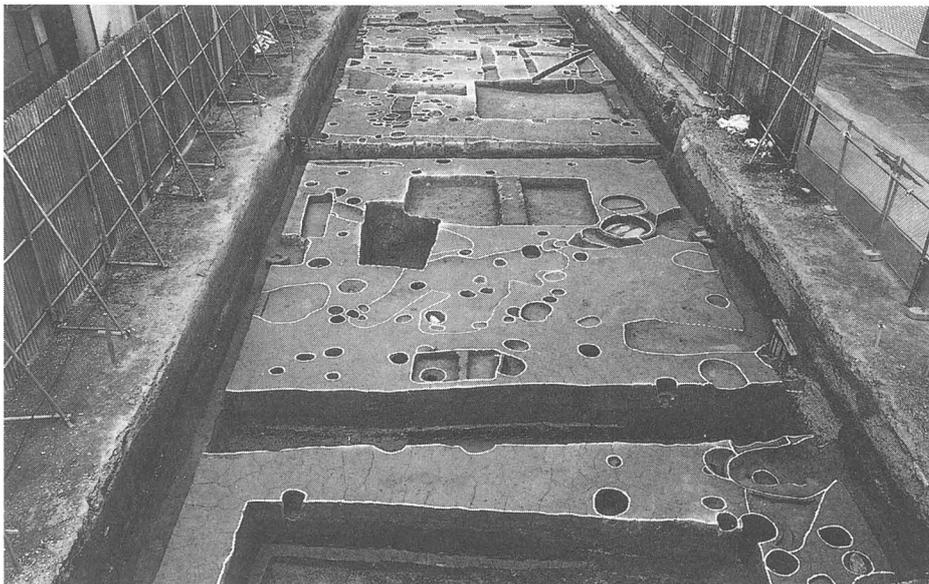
出土遺物としては平安時代後期の黒色土器B類の碗・「ての字状口縁」の土師器の皿・縁釉陶器が出土している。中世の遺物としては土師器・須恵器・瓦器等を主体とし、輸入陶磁器の青磁、白磁が出土している。特に、井戸・大形土塚からは瓦器碗、土師皿、東播系須恵器の捏鉢・甕、瓦質の三足塙や常滑焼の甕等の土器類や滑石製石鍋や漆碗等の日常雑器が多数出土している。また、検出された井戸は曲物を五段積みして底には羽釜を設置していた。

まとめ

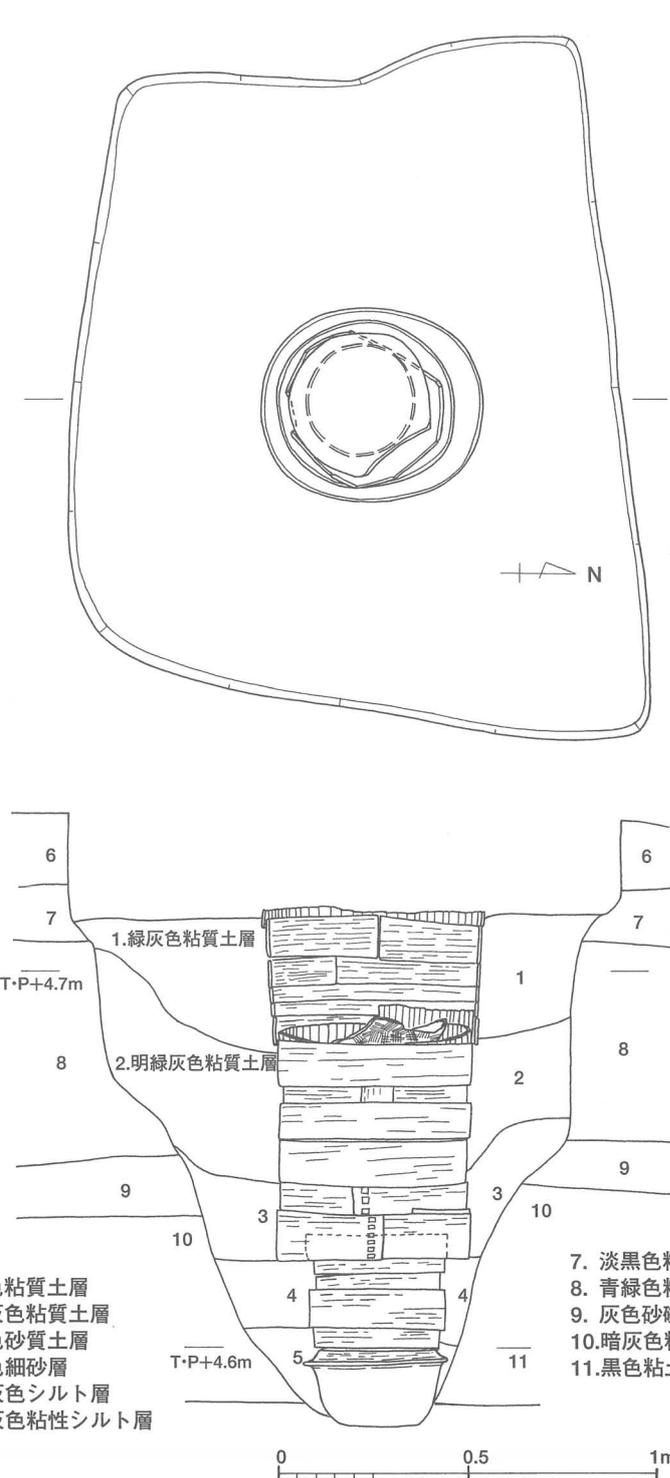
既往の調査では、部分的にしか検出できなかった平安時代中期から中世までの遺構・遺物が集中して検出されたことの意義は大きい。特に、複数の時期の違う屋敷地を想定できそうな、多数の柱穴・溝・井戸が検出されたことは、中世の溝咋(杭)庄を考えるのに重要な資料を提示することとなった。

註1) 免山 篤 古代学研究第55号『茨木市溝咋神社付近出土の瓦器』古代学研究会
昭和44年8月

註2) 『溝咋遺跡(その1・2)』『溝咋遺跡(その3・4)』(財)大阪府文化財調査研究センター
平成12年3月



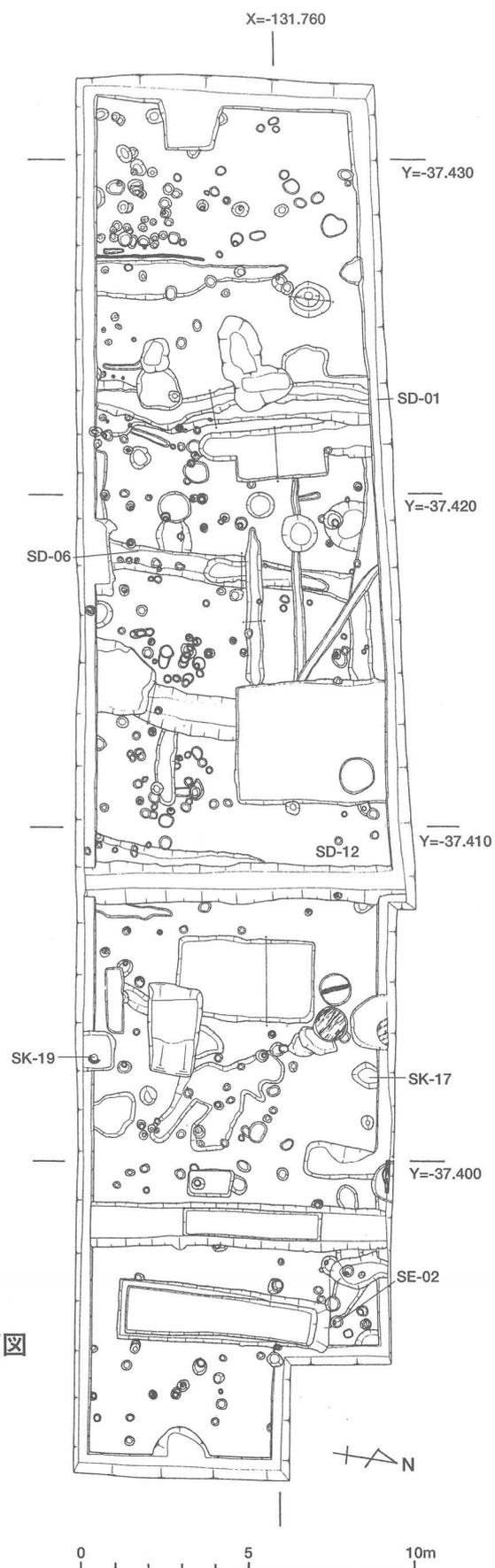
溝咋遺跡(その1) 遺構検出状況(東から)



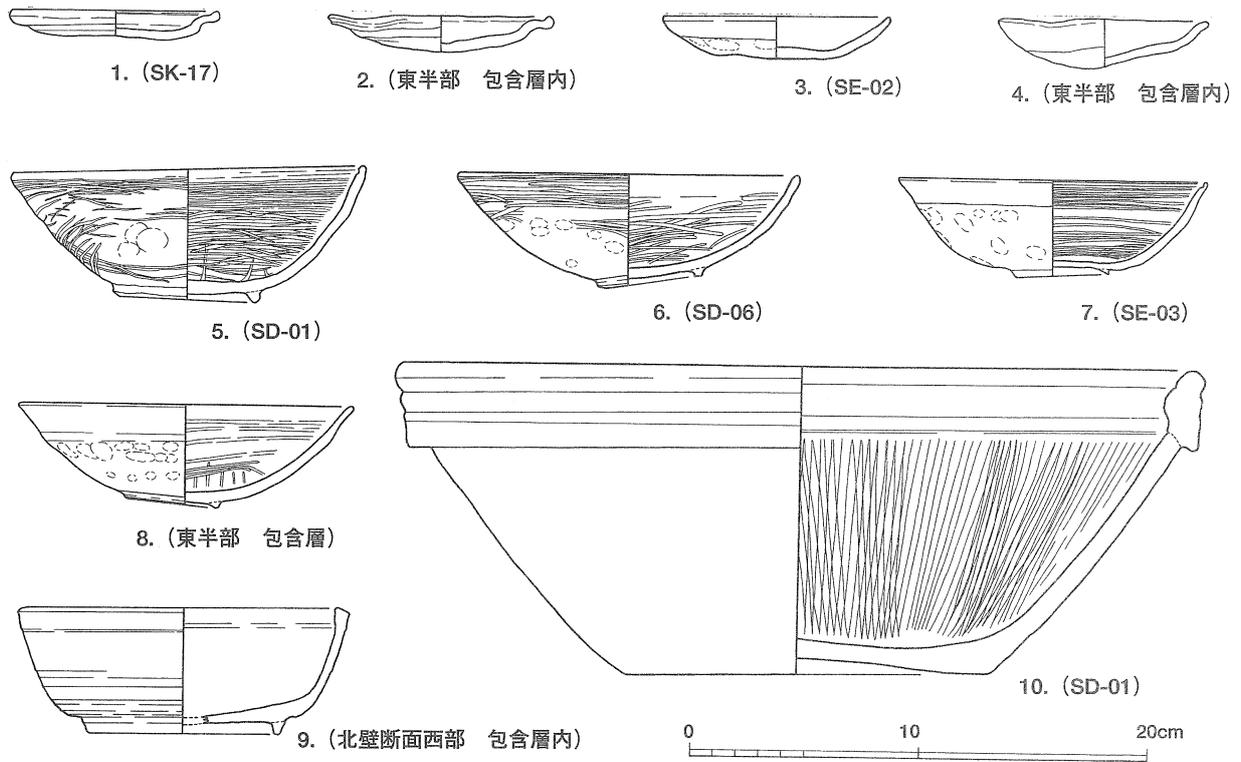
第11図 溝咋遺跡(その1) 井戸-3 (中央部下層) 平面実測図・立断面図



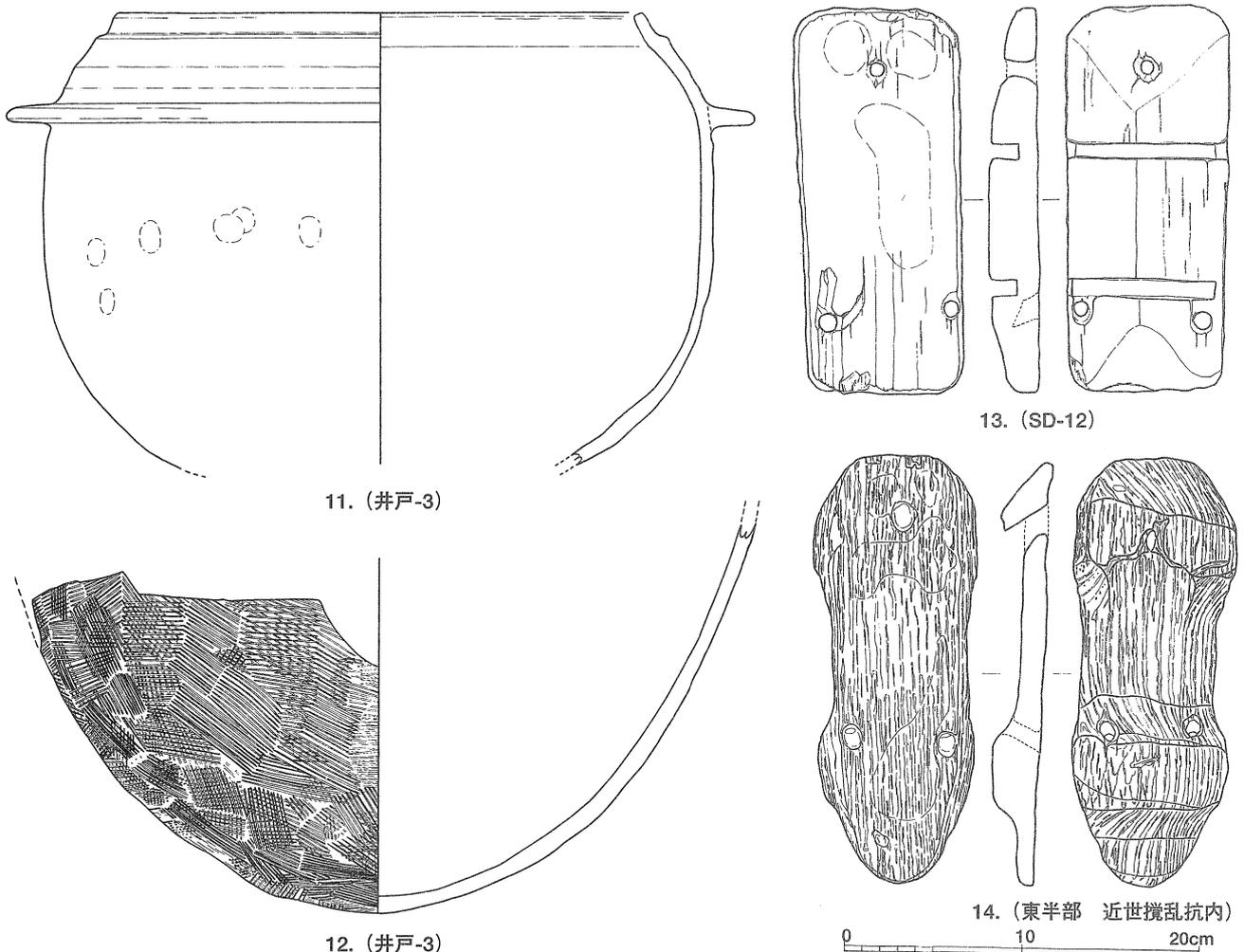
溝咋遺跡(その1) 井戸-3断ち割り状況(東から)



第12図 溝咋遺跡(その1) 遺構平面図



第13図 溝咋遺跡 出土遺物実測図 I (1~4土師器皿 5~8瓦器碗 9緑釉陶器 10播鉢)



第14図 溝咋遺跡 出土遺物実測図 II (11羽釜 12甕 13~14下駄)

茨木遺跡

所在地 茨木市大手町1621-1
調査原因 共同住宅建設事業
調査期間 平成12年7月13日～7月28日
調査面積 130m²
調査担当 中東 正之

調査結果

調査地は、茨木城下町と後の在郷町の範囲に相当する、茨木遺跡の南端部に位置する。本遺跡の位置する地区は、早くから市街化が進んだため、遺跡の全容が明らかになり始めたのは、近年の再開発に伴う発掘調査によるのである。既往の調査では、近世町屋跡をはじめ、古代末から中世の遺構・遺物、弥生土器なども出土している。

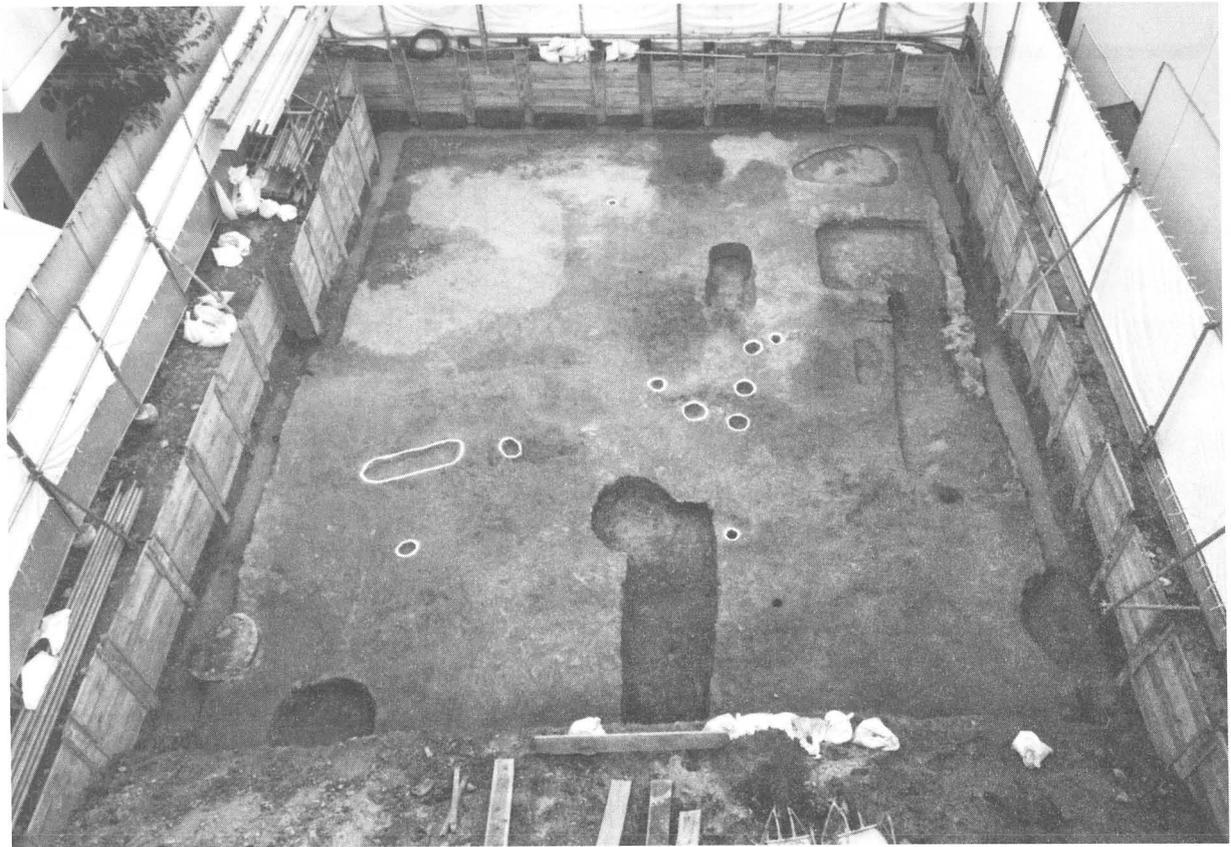
平成12年5月に試掘調査を実施したところ、中世包含層を確認した為、建築予定範囲を対象に、本発掘調査を実施した。

基本層序は、上層より、現代盛土層(95cm)、灰オリーブ色土(約15cm近世遺構面)、暗灰黄色土(約20cm中世包含層)、灰黄褐色粘質土(約20cm中世包含層)、鈍い黄褐色粘質土(約20cm中世遺構面)、灰～青灰色シルト混土(地山層)となる。遺構検出は鈍い黄褐色粘質土上面で実施した。検出面の一部では自然流路の埋土が表出しているが、土留め板保持の安全上、これを完掘することはできなかった。検出遺構は柱穴11個のみである。これらは建物、柵列等にまとめることはできなかった。

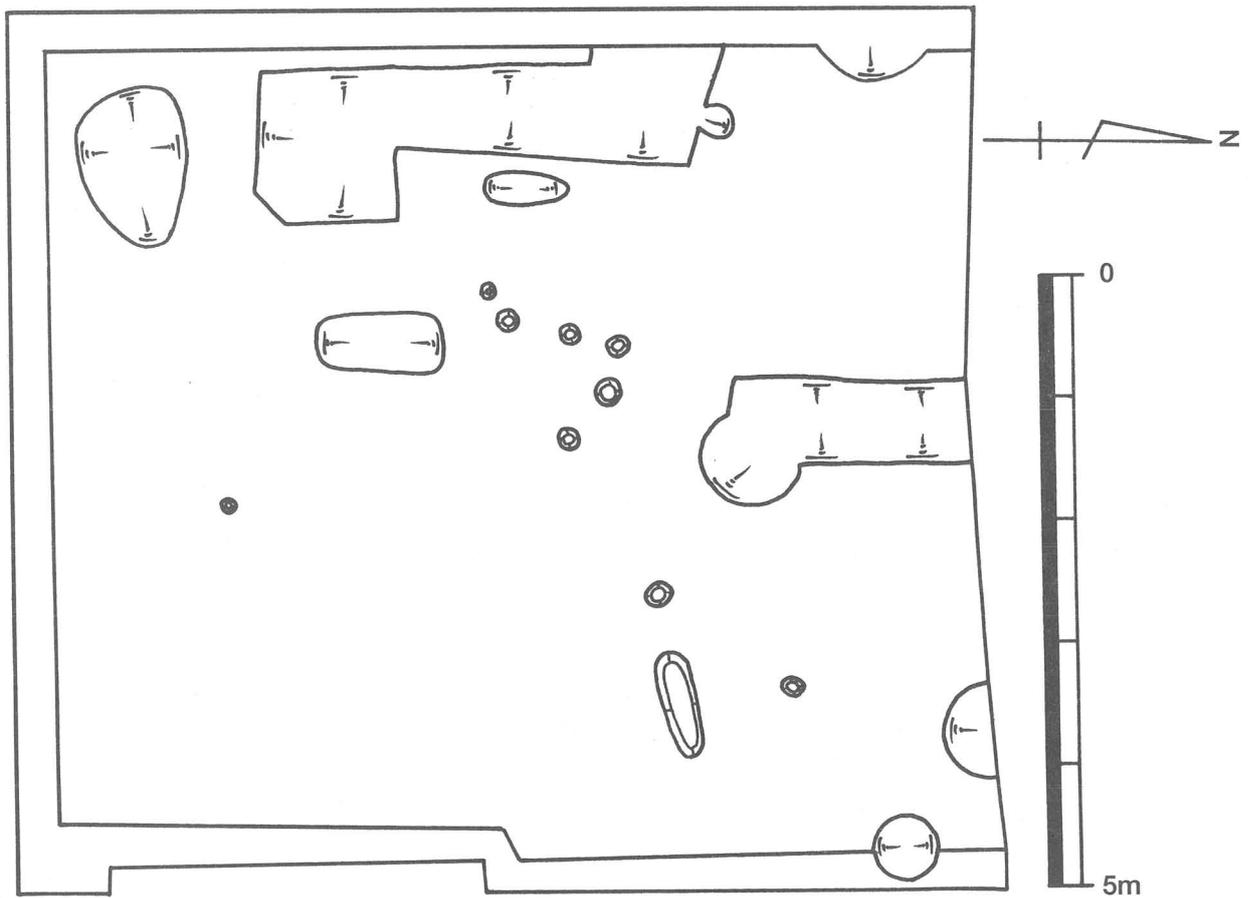
出土遺物は、土師器、須恵器、瓦器の他、陶器、染付、瓦などの近世遺物がある。中世土器類はすべて磨耗した細片で、明確な年代観を得ることはできなかった。遺物総量は、整理箱2箱である。

調査の結果、当地では、平安時代前半頃(11世紀前後)から中世に比定される遺構を検出したが、調査区が狭小で遺構も僅かなため、その性格を捉えることはできなかった。これまでの調査とあわせて、本遺跡南部には当該期の遺構面が普遍的に存在するものの、茨木川左岸の氾濫原面に立地しているためと、近世の整地や土取り穴等で、その遺存状況は良好とは言えない。また、元茨木川を挟んで対岸に位置する上中条遺跡や駅前遺跡では、弥生時代後期に遡る遺構が検出されており、本遺跡でも同時期の遺構が存在する可能性は高い。





茨木遺跡調査区全景（北から）



第15図 茨木遺跡 遺構平面図

溝 咋 遺 跡 (そ の 2)

所在地 茨木市五十鈴町地内
開発事業 市道敷設工事
調査期間 平成12年6月26日～平成12年8月18日
調査面積 392m²
調査担当 濱野 俊一

調査結果

溝咋遺跡は市域の東部、安威川を挟んで位置しており、五十鈴町、学園町、学園南町、新堂にかけて広がる集落遺跡である。遺跡の範囲は東西250m、南北500mに広がる。溝咋遺跡については、戦前から安威川付近で遺物が採集されていたが、昭和32年安威川の河川改修工事に伴って先鋒橋付近から瓦器碗が出土したことが遺跡発見の端緒である。その後、長らく、大規模な発掘調査が実施されていなかったが、平成7年から平成11年にかけて実施された大阪体育大学(浪商学園)跡地において住宅・都市基盤整備公団の大規模集合住宅建設工事に伴って(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施している。調査の結果、弥生時代前期から中世・近世までの遺構と遺物が検出された。主要な遺構としては弥生時代後期の土器棺や古墳時代前期の竪穴住居跡・井戸・溝・土塚等が、そして古墳時代前期から近世にかけての水田跡が検出されている。また、溝咋神社上宮跡が検出され中世まで創建が溯ることが判明している。遺物としては、銅釧・人面線刻土器などが出土している。特に、古墳時代前期の関東・東海・山陰・瀬戸内地域などの外来系土器が多数出土していることは注目される。

(2) 溝咋遺跡は、文献資料上にたびたび登場する溝咋(杭)庄にあたる。15世紀初めの応永14年の『長講堂領目六』に「こうどうりょうもくろく 斤分、ちようぶん 摂津国溝杭庄年貢未定」とみえ、『尊卑分脈』には溝杭源氏の祖・資兼すけかねの時には「ほかのいえ 外家の所領を相伝するに依って、しりょう 摂津国溝杭に住し、じゅう 溝杭大夫」と称したことが記述されている。この様に文献資料上に登場する溝咋(杭)庄は11世紀ごろには成立していたと考えられてきた。平成6年度に溝咋遺跡南東端の新堂一丁目において小規模なトレンチ調査によって平安時代後期から鎌倉時代の黒色土器B類の碗や瓦器碗が出土している以外は、まったく当該期の集落は検出されていなかった。

当該地は、調査以前は木造個人住宅と駐車場であったが、用地買収後は住宅は解体され裸地になっている。調査は、車道予定部分と橋脚部分に調査区を設定した。今回の調査区の西側の基本層序は、東側の調査区(その1)と同じく盛土層・近世水田層・床土層直下にシルト系の土質を主体とする平均3層以上の中～近世の包含層が堆積している。しかしながら、東側では旧安威川の流路にあたっており、近・現代盛土層直下には、分厚い黄色砂質土層が堆積しており、この層は



旧安威川に築かれた、近世の堤の盛土層と考えられる。堤の盛土層の下層は旧安威川の流路となっており、砂・礫・シルトを主体とする層が互層になって堆積している。

遺構は西側において、各堆積層から切り込んだ複数の時代の遺構が確認されたが、最終面にて一括検出作業をおこなった。以下、検出遺構について記述する。近世段階の遺構としては、井戸2基が検出された以外は、各包含層掘削時に土塚等が検出されたが明確なものは少なく、東側の調査区(その1)で検出された屋敷地の外側にあたるものと思われ、調査地の大半が近世の堤であったものと思われる。中世段階の遺構としては、数棟復元できそうな掘立柱建物の柱穴多数と溝、土塚等が検出されている。

また、西側で検出された近世井戸(SE-02)の断面に弥生土器が検出されたため、下層の一部を調査した結果、弥生時代前期前半の土塚1基とその上面に広がる不定形な落ち込みを検出した。また、西側壁面において古墳時代前期の土塚1基を検出した。

出土遺物としては、弥生時代前期前半の土塚からは壺・甕そして古墳時代前期土塚からは布留式の甕が出土している。平安時代から中世にかけての遺物としては、黒色土器B類の碗・「ての字状口縁」の土師器の皿・瓦器碗と輸入陶磁器の白磁皿が出土している。また、自然河道からは弥生時代から中世までの土器が出土しており、特に、旧河道の河岸付近からは完形の楠葉型地瓦器碗が出土している。

弥生時代前期前半の土塚から出土している土器は、三島地域ではもっとも古い様相を示している土器群である。一部、時期が下がる壺類も認められるが、土塚の直上に広がる不定形な落ち込みの遺物も混在しているものと思われる。

まとめ

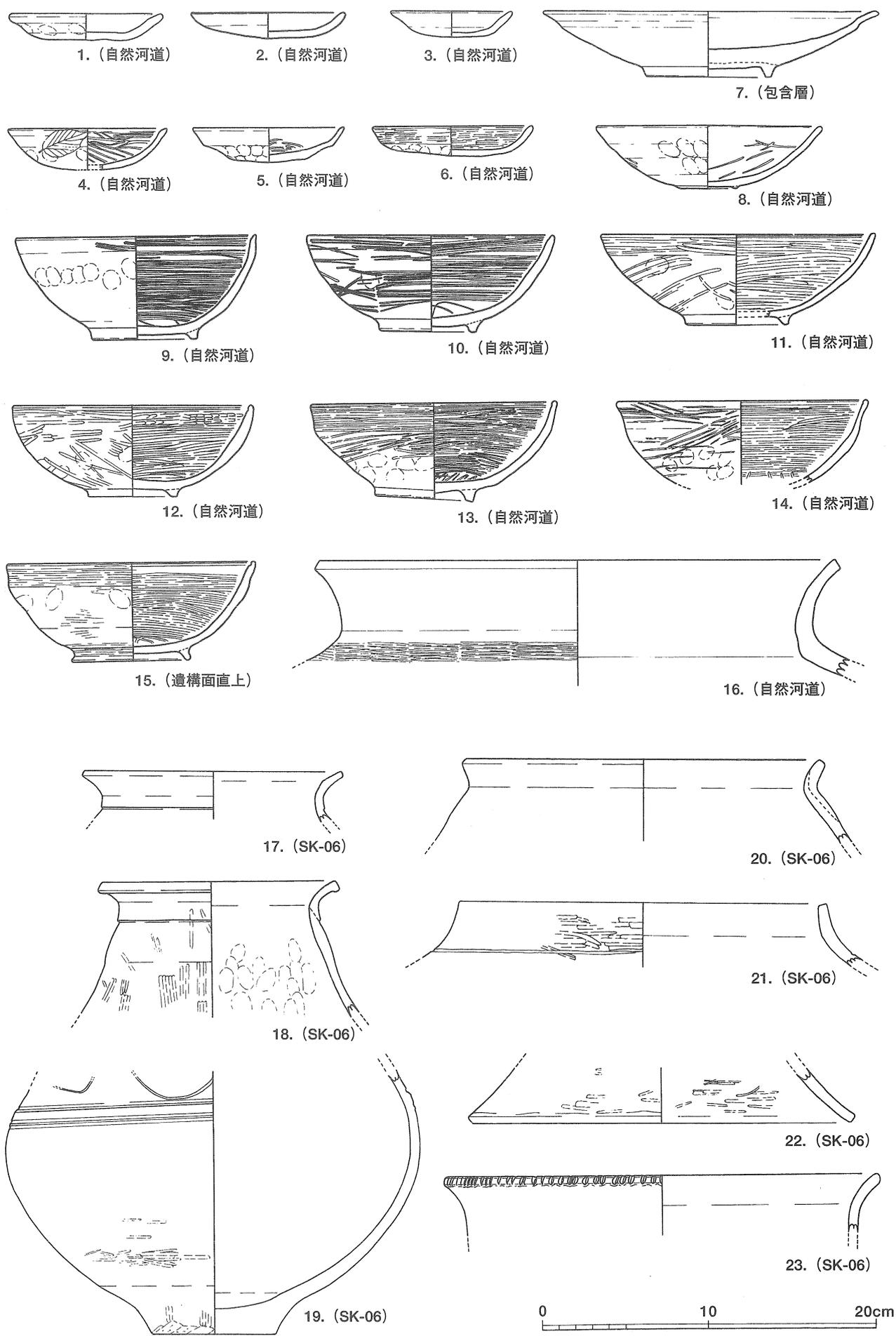
今回の調査地点では、平安時代中期から中世までの遺構面は西側のみで検出され、調査区の大半が安威川の旧河道になっていたことが判明した。そして、この旧河道は、中世末期には埋没して調査地の東側に流れが変化したものと思われ、その後、近世初頭には堤が形成されたものと考えられる。また、弥生時代前期前半から古墳時代前期の遺構と土器の検出が現地表下3.5mの深さから出土したことは、沖積地の深所にも弥生時代の遺跡が埋没していることを改めて認識させられる事となった。特に、弥生時代前期前半の土塚から出土している弥生土器の一群と、前後する時期に併行すると思われる遺跡は、茨木市内では東奈良遺跡・総持寺遺跡があげられ、摂津地域全体では高槻市津之江南遺跡・神戸市大開遺跡・本山遺跡そして山城地域では京都市下鳥羽遺跡など数遺跡しか発見されていない。このため、三島地域に初期稲作農耕を主体とする弥生文化の伝播を考える上で重要な資料となった。

註1) 免山 篤 古代学研究第55号『茨木市溝咋神社付近出土の瓦器』古代学研究会

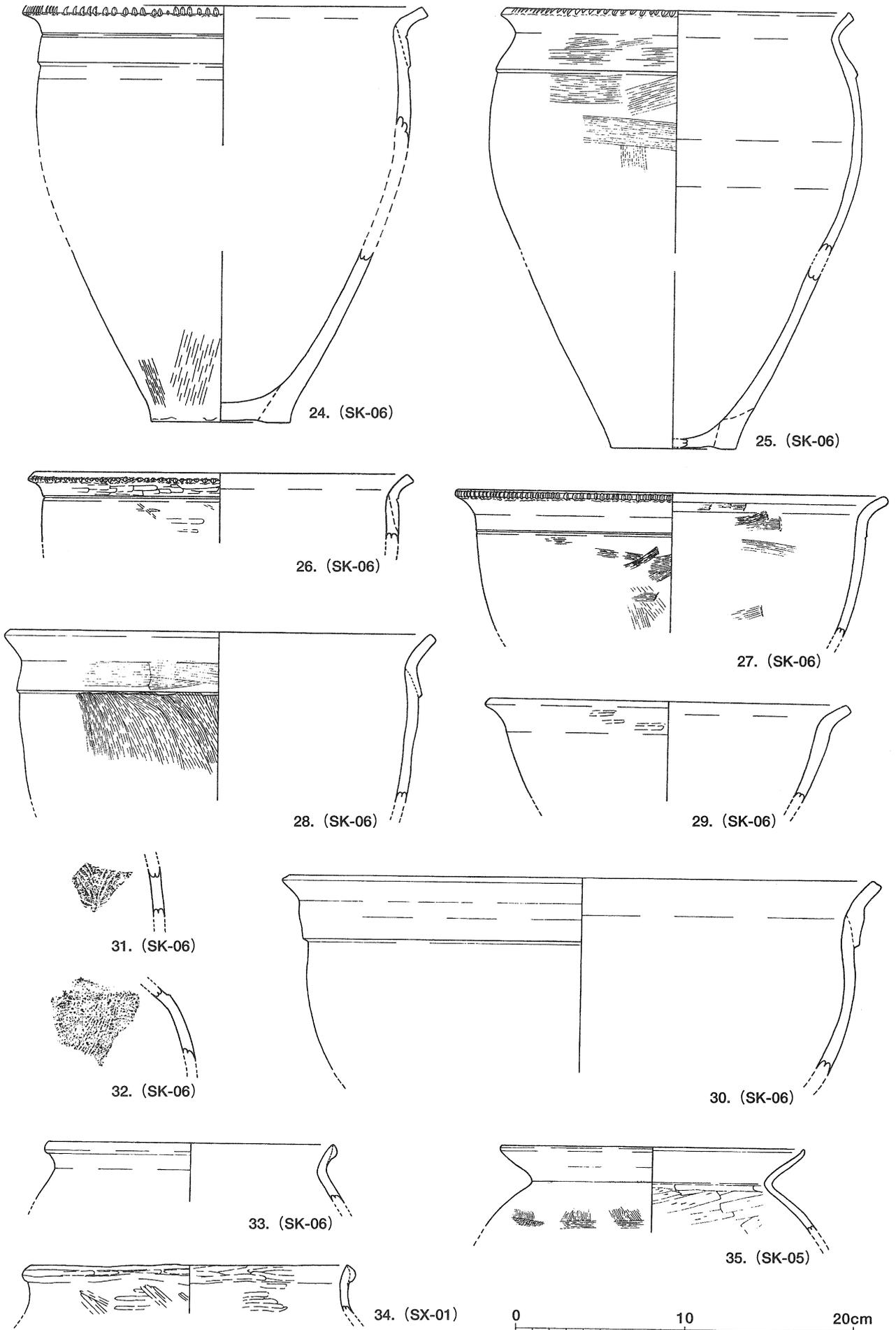
昭和44年8月

註2) 『溝咋遺跡(その1・2)』『溝咋遺跡(その3・4)』(財)大阪府文化財調査研究センター

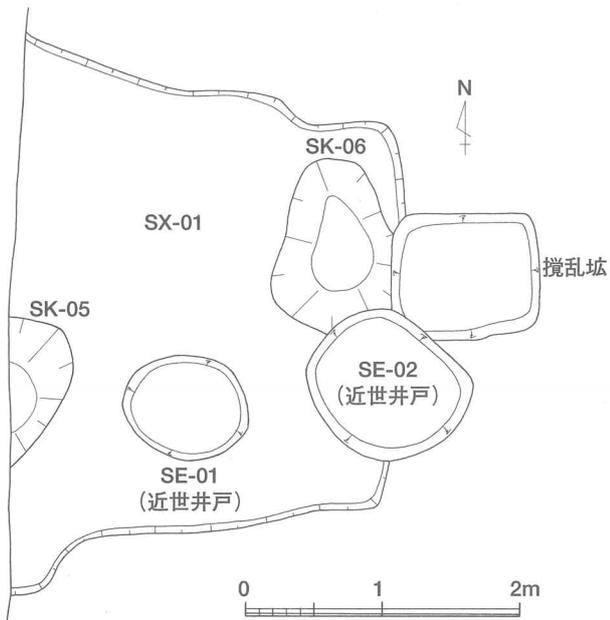
平成12年3月



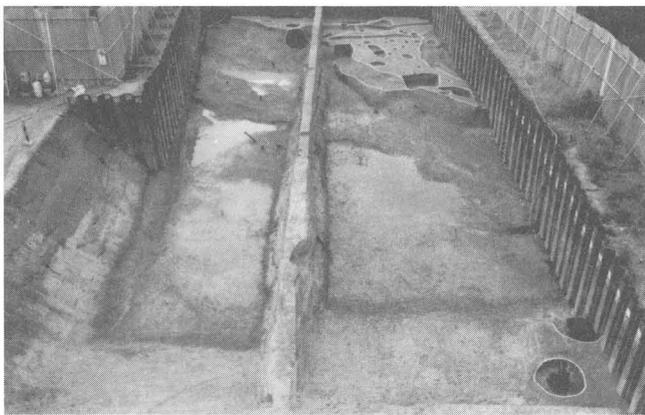
第16図 溝作遺跡(その2) 出土土器実測図 I (1~3土師皿 4~6瓦器皿 7青白磁皿 8~15瓦器碗 16~21壺 22甕蓋 23甕)



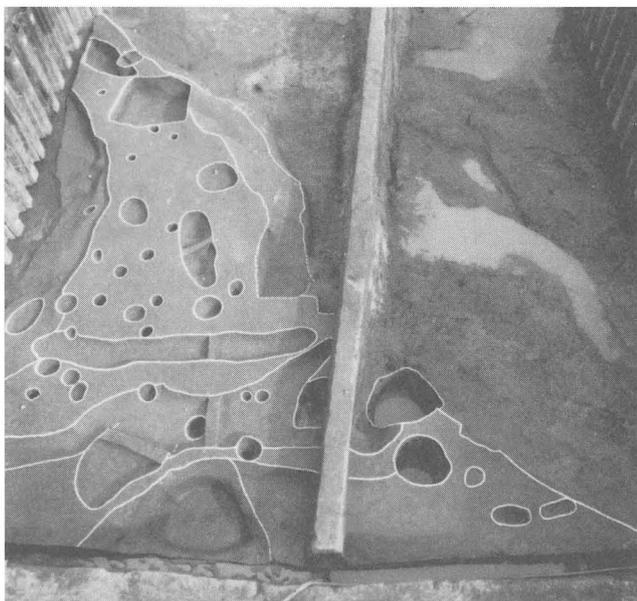
第17図 溝作遺跡(その2) 出土土器実測図Ⅱ (24~28・35甕 29~30鉢 31~32壺 33~34無文系土器)



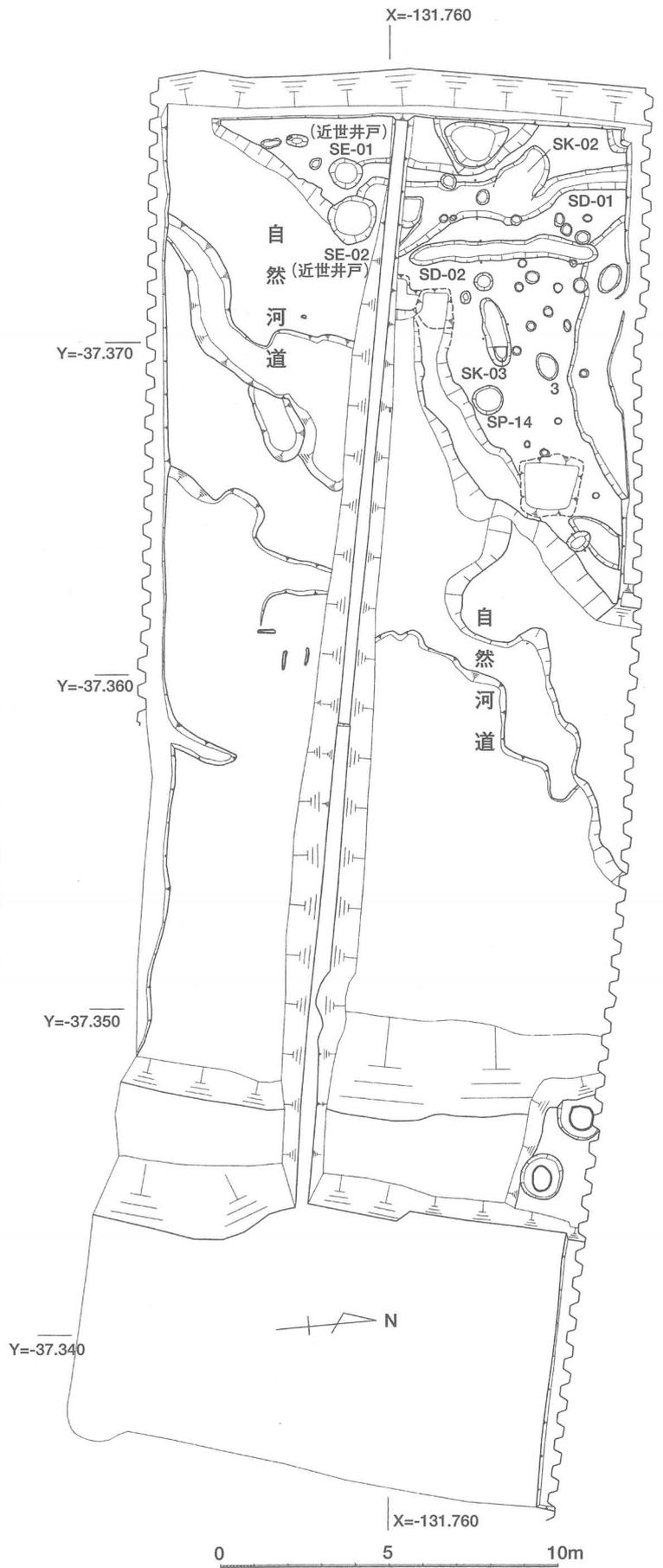
第18図 溝咋遺跡 (その2)
調査区西部下層遺構平面図



溝咋遺跡 (その2) 調査区 (東から)



溝咋遺跡 (その2) 調査区西部 (西から)



第19図 溝咋遺跡 (その2) 遺構平面図

春日遺跡

所在地 茨木市春日一丁目72-8、72-7、72-3・72-5
調査原因 共同住宅建設事業
調査期間 平成12年9月1日～9月14日
調査面積 255m²
調査担当 中東 正之

調査結果

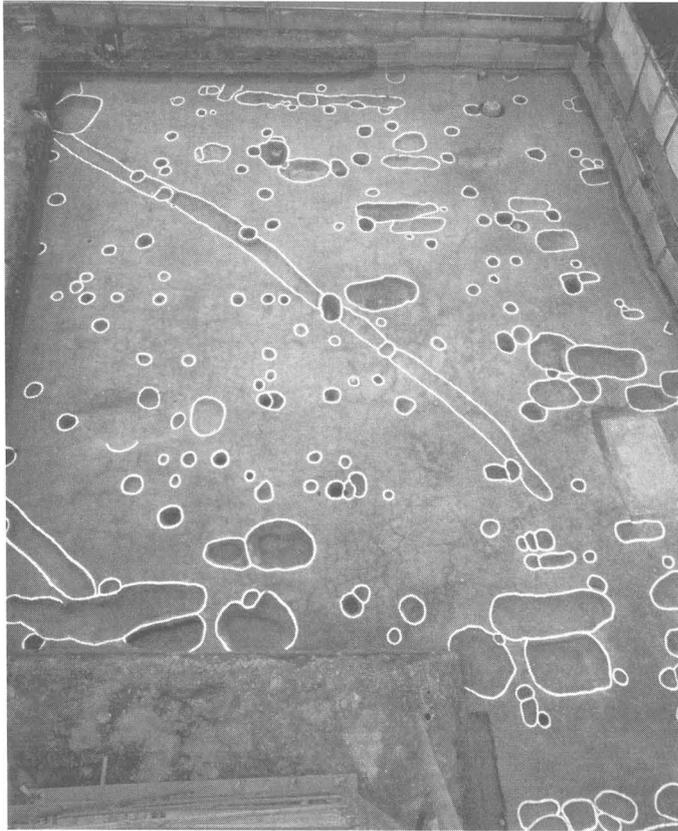
調査地は、弥生時代から中世の複合遺跡である、春日遺跡の包蔵範囲の南部に位置する。当地付近の既往調査では、弥生時代中期から奈良時代の遺構・遺物が検出されている。平成12年8月に試掘調査を実施したところ、遺構面を確認した為、建築予定範囲を対象に、本発掘調査を実施した。

基本層序は、上層より、現代盛土(40cm)、旧耕土(5～15cm)、暗灰黄色土(15～25cm中世包含層)、明黄褐色粘質土(地山層)となる。遺構検出は地山層上面で実施した。検出遺構は、溝・溝状遺構10条、掘立柱建物5棟、土壇10基、柱穴320個を数える。時期は、弥生時代中期から中世に及ぶが、掘立柱建物など、主体となる遺構の時期は平安時代後期頃と思われる。検出状況は、北側調査区において密であるが、中世以降の整地に伴う溝・堀込みも多い。掘立柱建物は、概ね同一の柱筋・方向を示し南北に並ぶ、東西4間×南北1間の建物3棟のほか、東西2間×南北2間および東西2間×南北3間の建物を検出した。

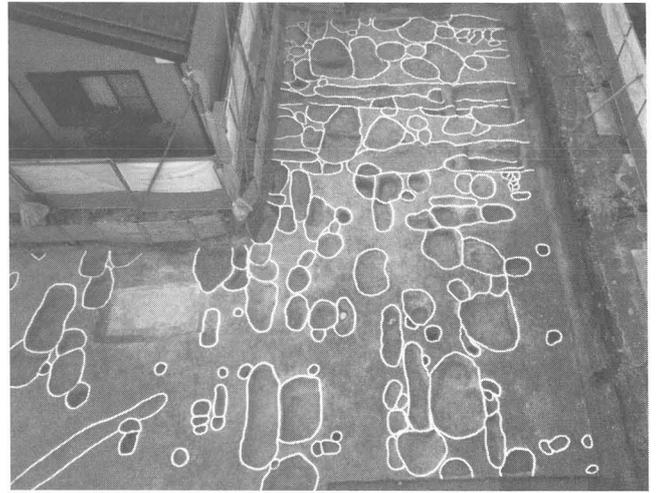
出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石鏃、砥石などがある。遺物総量は整理箱1箱である。

調査の結果、弥生時代中期から中世の遺構群を検出した。割合、密な検出状況であるが、当地で何等の宅地利用がなされていたのは、平安時代中期以降と考えられる。建物はさらに数棟の成立も予想されるが、建て替えられた形跡はなく、宅地としての利用は長く続いたものではなかったとみられる。中世期にはいると、当地も含め、本遺跡全域で耕作地化していった様子が伺われる。この様相は近世を通じて大きく変化はなかったものと判断される。

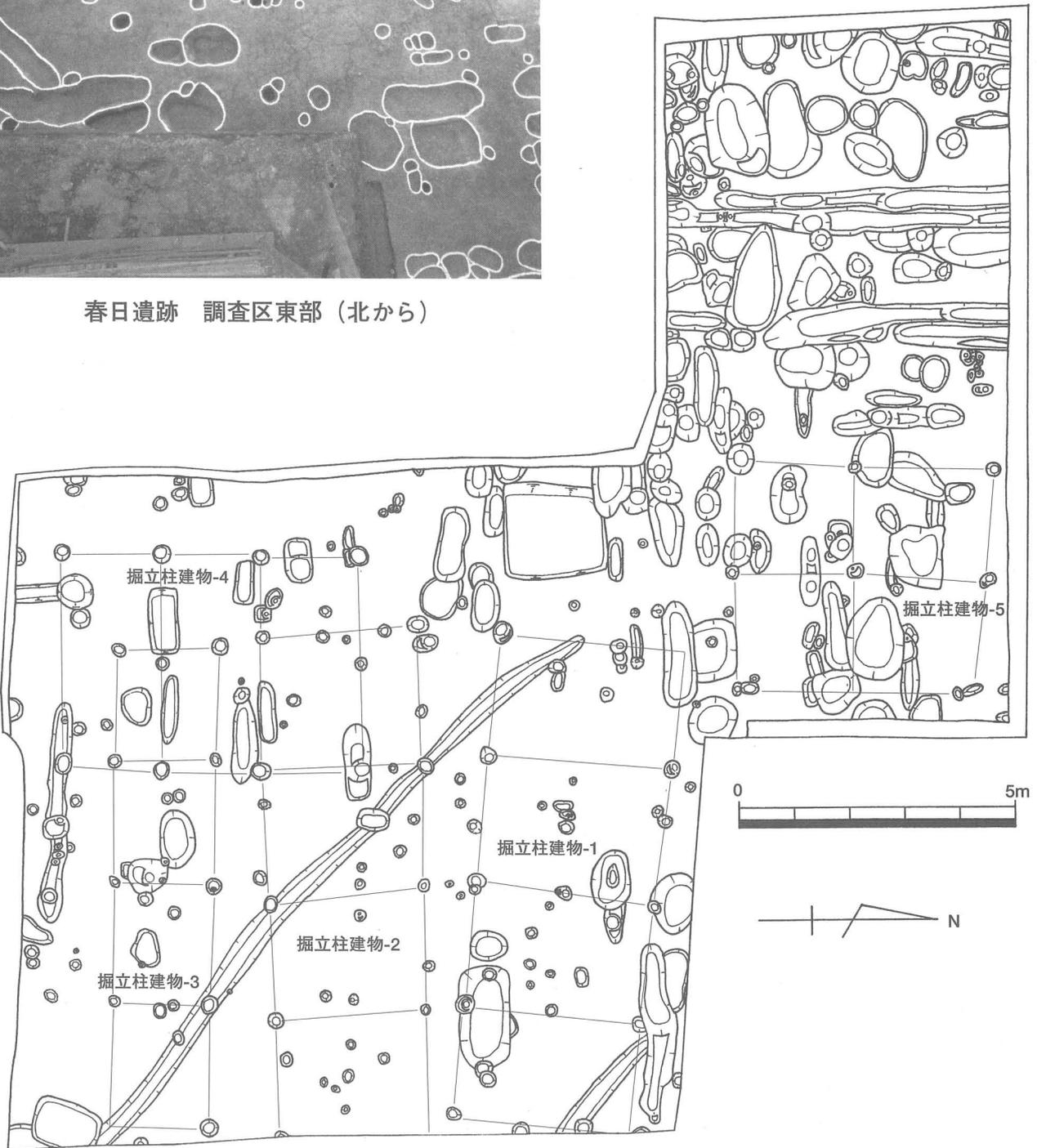




春日遺跡 調査区東部（北から）



春日遺跡 調査区西部（東から）



第20図 春日遺跡 遺構平面図

常 楽 寺 跡

所在地 茨木市蔵垣内三丁目地内
開発事業 消防用貯水槽建設事業
調査期間 平成12年9月21日～平成12年9月29日
調査面積 64m²
調査担当 宮脇 薫

調査結果

常楽寺跡は、茨木市の南端の蔵垣内三丁目に位置しており、近くの万福寺には飛鳥時代後期の頃のものと考えられている塔心礎(三宅廃寺)がのこされている。

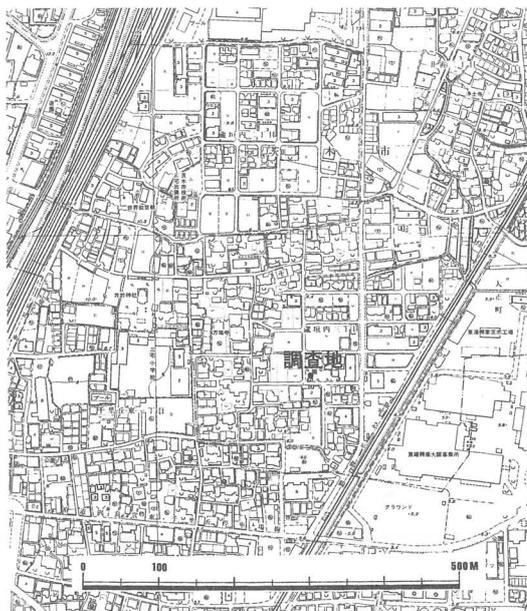
今回の調査地は昭和50年代に区画整理事業が実施されたところであり、貯水槽の設置場所は地区の公園の一角である。現地表下約1.7mまでは造成土・耕土及び床土であり、その下層の包含層である褐色土が30cm堆積している。

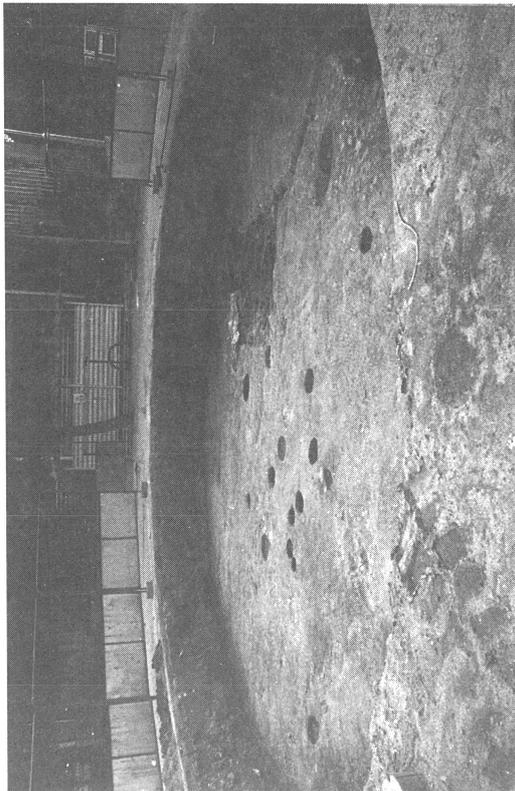
今回の調査によって検出された遺構は、柱穴12か所である。

柱跡の規模は径が15～25cmで検出面が削られており、深さが5～10cmである。いずれの柱穴の埋土も褐色土であり、遺物は出土しなかったため明確な時期はわからなかった。

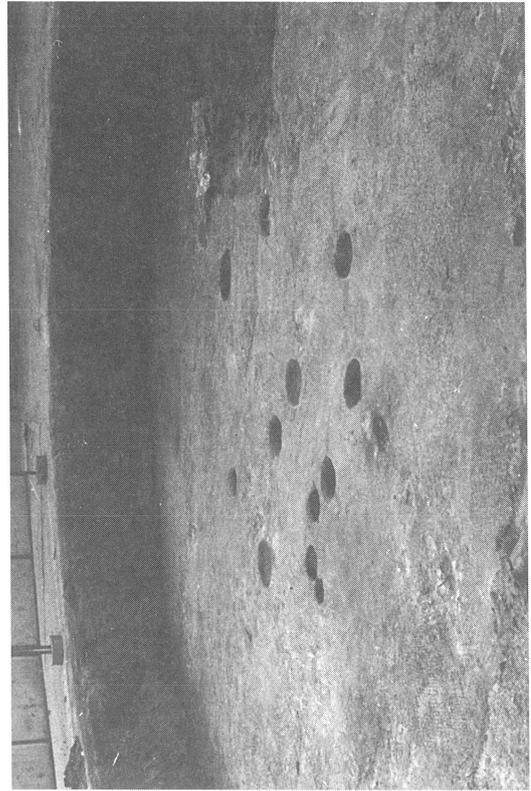
このほか出土した遺物は、古墳時代の土師器及び須恵器である。

常楽寺跡関連の遺物や遺構は検出できなかったが、古墳時代の土師器・須恵器が出土したところから、近くに古墳時代の集落の存在が考えられる。

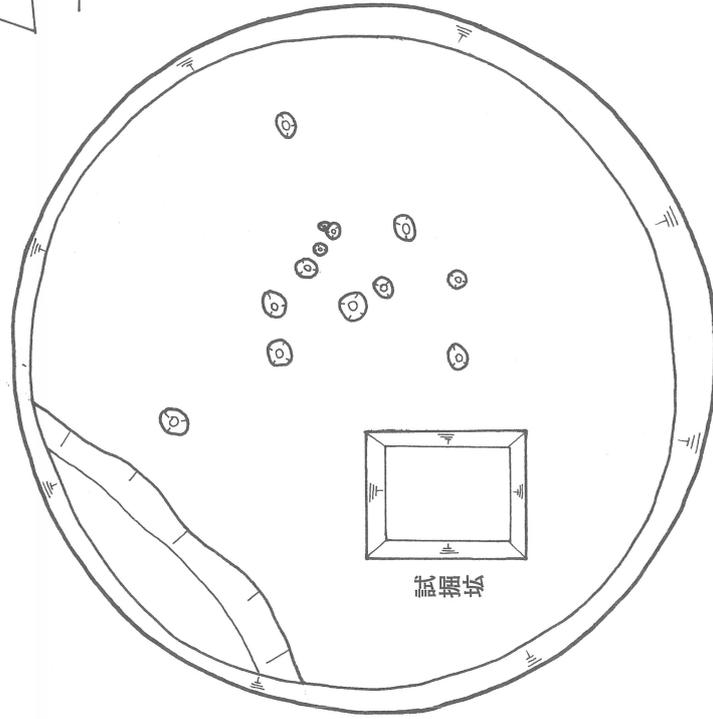
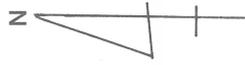




常楽寺跡 全景写真 (北から)



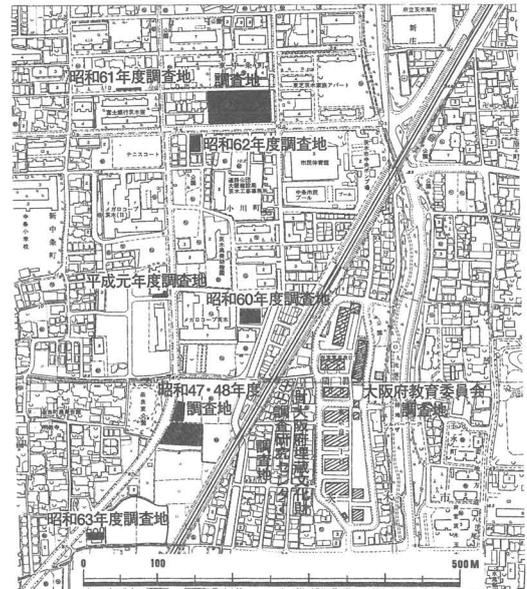
常楽寺跡 柱穴検出状況 (北から)



第21図 常楽寺跡 遺構平面図

中条小学校遺跡

所在地 茨木市東中条町985-2他
調査原因 共同住宅建設事業
調査期間 平成12年11月9日～12月27日
調査面積 700m²
調査担当 中東 正之
調査結果



調査地は、弥生時代中期から中世の複合遺跡である、中条小学校遺跡の包蔵範囲の東端部にあたる。本遺跡は、昭和51年、当地の西約200mに位置する、中条小学校改築に伴って発見されたものである。本遺跡は、拠点集落である東奈良遺跡の分村として成立したとみられるが、当該地区が割合早くから市街化していた為、その全容が明らかになりはじめたのは、最近の再開発等に伴う発掘調査の成果によるものである。現在、判明している包蔵範囲も東西約400m、南北約1kmを測る。平成12年4月、当地において試掘調査を実施したところ、弥生時代から中世の包含層と遺構を確認した為、建築予定範囲を対象に、本発掘調査を実施することになった。調査は、既設建物解体工事と並行するため、その工区を東西に分割した。東側第1工区を11月9日より12月9日まで実施した。12月13日より西側第2工区の調査を実施し、12月27日で全ての調査を終了した。

基本層序は、現地表面下、現代盛土層(170cm)、旧耕土(10～20cm)、明褐色・灰黄色粗砂(約30cm)、縁灰色砂質土(0～20cm)、黒褐色粘質土(0～10cm包含層)、明黄褐色砂質土(地山層・検出面)となる。遺構検出面は、標高8m付近を測るが、遺跡中心部と比べて2m程も低い。本遺跡から元茨木川にかけては南北方向の大形埋没流路が確認されており、調査区の層相も氾濫原に近いことを示している。検出遺構は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭(庄内併行期)の方形周溝墓群、古墳時代中期の埋没墳をはじめ、古墳時代前期初頭(庄内併行期)を主体とする溝14条、井戸1基、土塚13基、柱穴・小穴197個を検出した。柱穴類は、建物などとしてまとめることはできなかった。以下、主要な遺構について概説する。

方形周溝墓-1の主体部は削平されており、西側周溝は有していない。規模は東辺で9mを測り、方向は南北軸に沿っている。溝幅1～2m、深さ40cm程度を測り、周溝内より供献土器きょうけんどきとみられる古墳時代前期初頭(庄内併行期)の高坏で蓋をした壺棺が出土した。方形周溝墓-2は、方形周溝墓-1と重複しながら大半が調査区外に至る溝状遺構である。断面は2段の堀方を呈し、溝幅1.7m、深さ1.3mを測る。埋土内より古墳時代前期初頭(庄内併行期)の土器片が出土した。方形周溝墓-4は四方に廻り、陸橋部を有しない。主体部は削平されているが、南隅に木棺痕跡もつかんこせきらしき長軸1.9m

を測る方形の土壇がある。規模は一辺11m、周溝は幅1~2m、深さ30~60cmを測る。周溝内より古墳時代前期初頭(庄内併行期)の壺、高坏の完形品が出土した。SX-6は、幅60cm、深さ20cm程度の周溝である。南半部は調査区外に至るが、北辺で8.5mを測る。周溝墓かどうかは不明である。溝内より古墳時代前期初頭(庄内併行期)の土器片が出土した。竪穴住居跡-1は、調査区南西隅で一部が検出されたのみである。一辺は5m強を測るとみられ、重複する溝-1より層位的に新しい。遺物は出土しなかった。溝-2は、円墳の周溝と考えられ、周溝心心間は20m程度と推測される。主体部は削平されており、その形式は不明である。遺物は、周溝内より5世紀後半代の須恵器の破片が出土しているが、石室部材、葺石、埴輪等は全く出土しなかった。遺物総量は整理箱10箱で、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器類などがある。その多くは、古墳時代前期初頭(庄内併行期)の最も古い段階を示すものと思われるが、いわゆる叩き目の甕はほとんど出土しなかった。

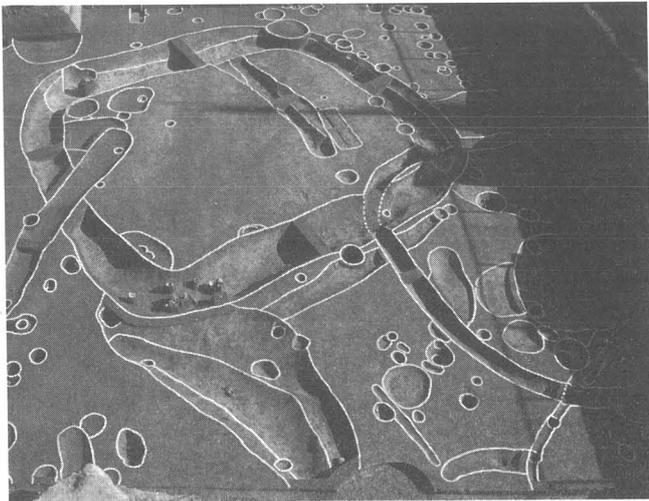
最近の調査結果によると、本遺跡の範囲は古墳時代前期初頭(庄内併行期)頃に大きく拡大、もしくは北側へ中心部を移したものと考えられ、古墳時代の包蔵地である駅前遺跡と端を接していることが判明している。本調査では、当該期の墓域を示す遺構群が検出されたが、調査区南西隅には住居跡が重複しており、東奈良遺跡の分村として成立した本遺跡も、古墳時代を迎える頃には飽和状態に達しつつあったと考えられる。



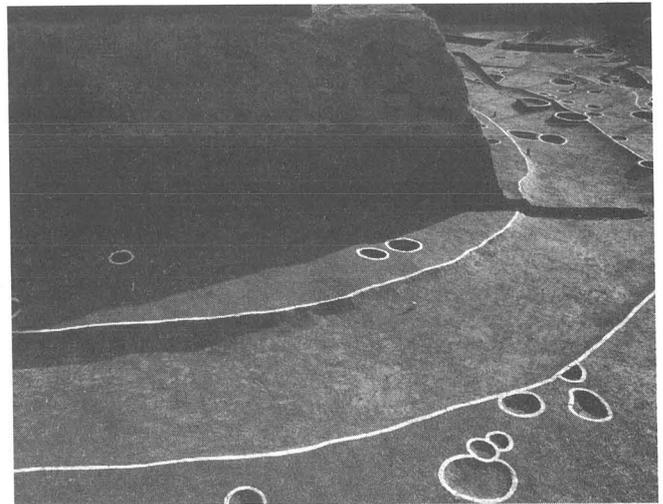
中条小学校遺跡 調査区 (東から)



中条小学校遺跡 調査区 (東から)



中条小学校遺跡 調査区西部 方形周溝墓-4ほか (西から)



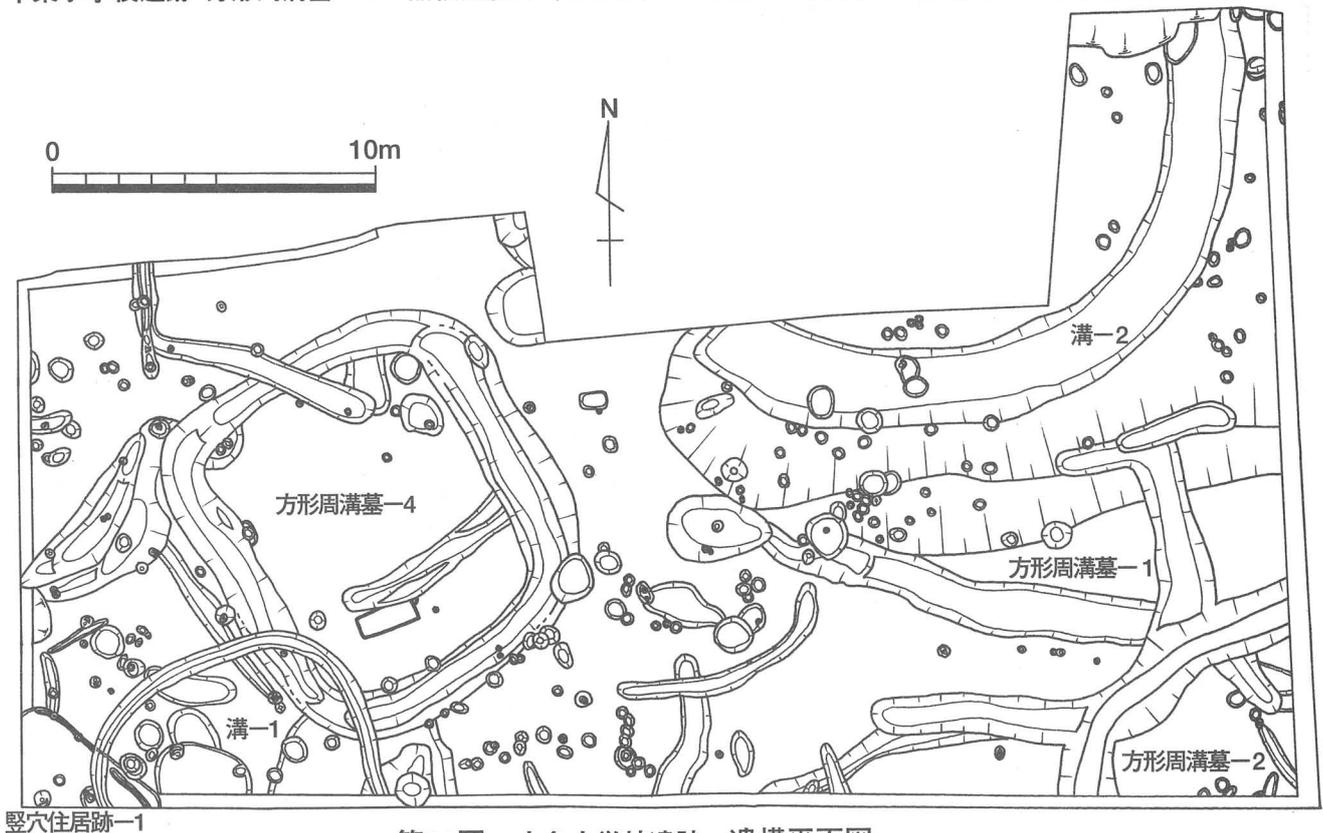
中条小学校遺跡 溝-2検出状況 (南から)



中条小学校遺跡 方形周溝墓-4土器検出状況 (北から)



中条小学校遺跡 方形周溝墓-1壺棺検出状況 (東から)



第22図 中条小学校遺跡 遺構平面図

鼻摺古墳

所在地 茨木市耳原三丁目10
開発事業 市道敷設事業
調査期間 平成13年1月10日～1月30日
調査面積 250m²
調査担当 横山 成己
調査結果

鼻摺古墳は勝尾寺川の東に東西にのびる低位段丘上に築かれた方形墳であり、同段丘上の東方200m先には横穴式石室に2個の石棺を有する耳原古墳が位置する。

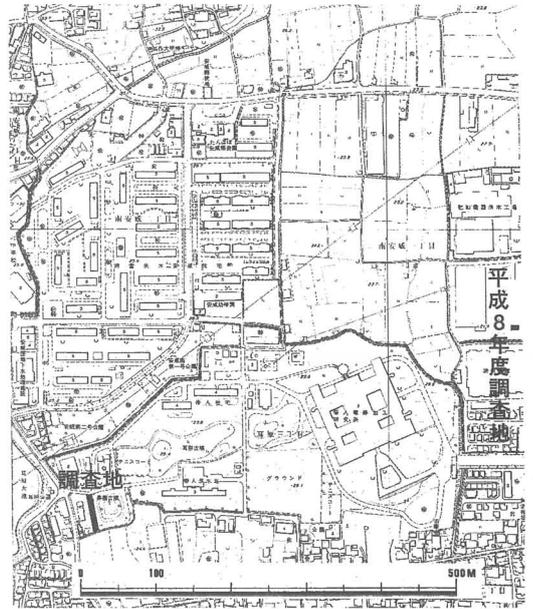
また同古墳の北側に南北にのびる丘陵上の先端には、古墳時代前期の前方後円墳である將軍山古墳と古墳時代後期の円墳4基で構成される將軍山古墳群が存在する。また南方には、縄文時代晩期から弥生時代にかけての墓地・集落遺跡である耳原遺跡が広がっている。

古墳は、昭和35年5月の大阪市立美術館と茨木市教育委員会による発掘調査により、一辺が約33mの方形墳であること、墳丘の高さが約5.5mであること、全周する濠を有しており、濠の規模は、幅が南側で12m余り、東西北側で7m弱、深さが1.4mであることが確認されている。しかしながら主体部などは発見されておらず、出土遺物も6世紀から7世紀のものと考えられる陶器片、瓦器片がわずかに出土しただけである。周濠はその後安全のため埋め立てられ、現状では墳丘のみが保存されている。

今回の調査の経緯としては、古墳の西側に市道が敷設されることに伴い平成12年10月に試掘調査を行った結果、市道敷地内に墳丘西側の周濠が及ぶ可能性があることが認められたため、本発掘調査を行うこととなった。

調査の結果、調査区の南側での土層の堆積状況は、第1層(表土)、第2層(暗灰色砂質土層)、第3層(黄褐色砂質土層)、第4層(暗灰色礫混土層)、第5層(黄灰色礫混土層～地山層)であり、調査区北側では第4層が欠落するものの基本的な層序は同一である。

遺構としては、調査区北端から南に約38mほど延びる大きな溝状の落ち込み(SX-1)が検出された。この落ち込みは第2層の下面から検出され、第3層を切り込む形で形成されている。調査区内では落ち込みの西側肩部が確認できた。溝状落ち込み(SX-1)の断面形態は、肩部から緩やかな傾斜で落ち込んでいき、深さ約55cmで底面に至っている。調査区東側でやや立ち上がりを見せているものの、調査区の東西幅と、調査区東側に排水管が埋設されている関係で、明確な底面幅は確認できなかった。埋土の堆積状況は、礫混じりの砂質土が東西両側から落ち込む形で堆積してい



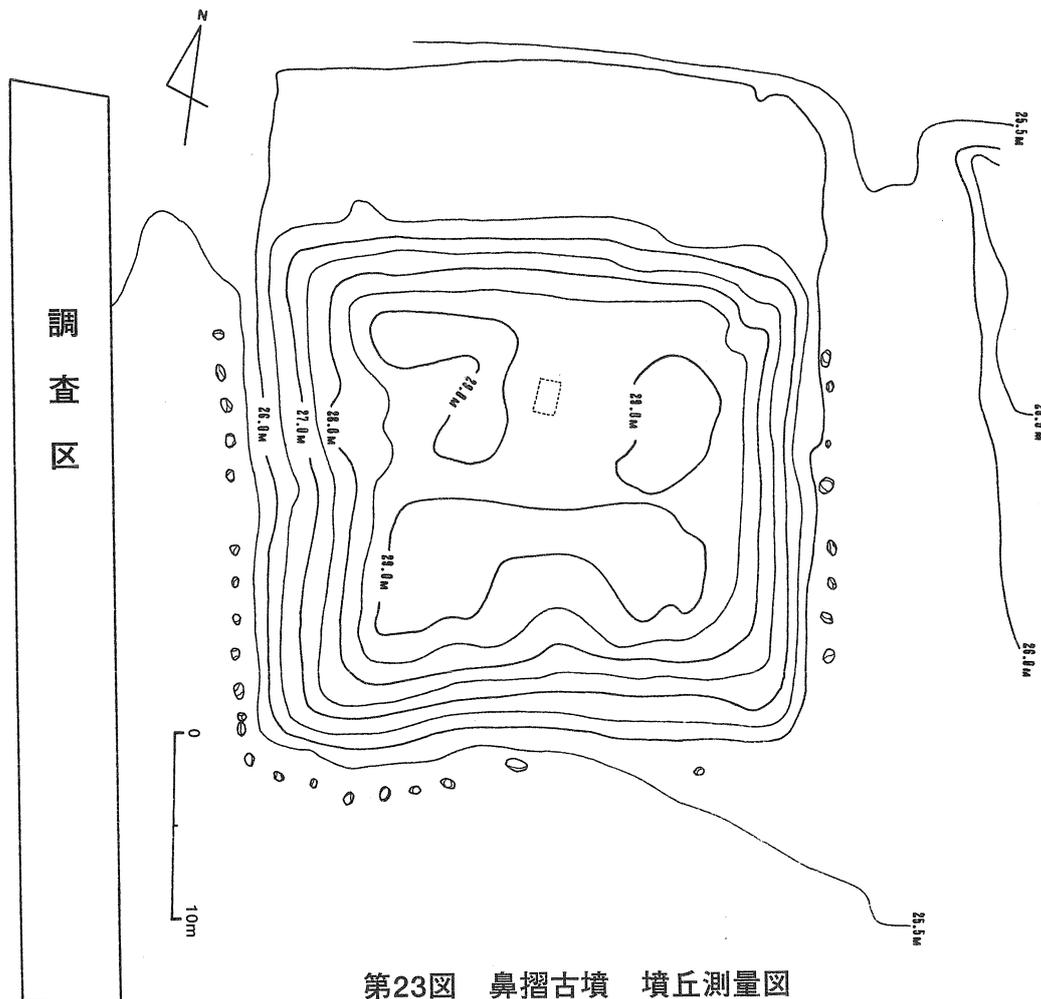
る。この埋土内からは遺物は全く出土していない。

その他の遺構としては、第4層、第5層を掘り込む形で残存している土壇やピットが数基検出されたが、いずれも不定形なものであり、建物等として確認できるものはなかった。

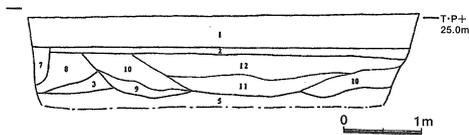
遺物の出土した遺構としては、調査区中央部西端に溝状落ち込み(SX-1)に切られる形で確認された土壇(SK-1)が唯一のものである。この土壇は、溝状落ち込み(SX-1)の底面確認のために、調査区中央部にトレンチを入れた際に検出されたもので、平面形を確認できなかったために、土層断面で遺構であることを確認した。この土壇からは、弥生時代中期中葉(畿内Ⅲ様式)の壺形土器などが出土している。

今回の調査では、鼻摺古墳の西側における周濠の確認が期待されたが、本調査で確認された溝状の落ち込み(SX-1)は、古墳の周濠としては落ち込みの南端と墳丘との位置関係が整合性に欠けている。また今回の調査区は、現状の墳裾から西側約7mの地点に設置されたものであるが、昭和35年の調査では西側の周濠が幅約7mと確認されていることに対して、溝状落ち込み(SX-1)は調査区東側で僅かではあるが墳丘側に立ち上がりを見せている。これらのことを考えると、この落ち込みと墳丘との関係には不確定な要素が多く、さらなる検討が必要と言える。

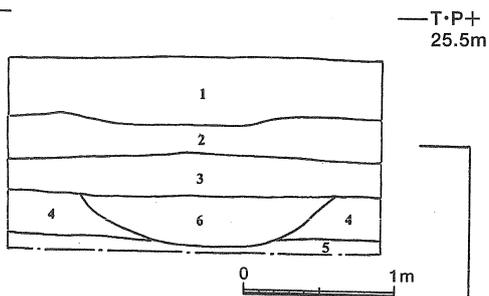
しかしながら、本調査区内では、溝状落ち込み(SX-1)に切られる形で弥生時代中期の土壇が検出されており、溝状落ち込み(SX-1)の形成時期を推定できると共に、従来、遺跡の範囲外であった鼻摺古墳の西側にまで耳原遺跡の北西限が延びる可能性が高まったと言える。



第23図 鼻摺古墳 墳丘測量図



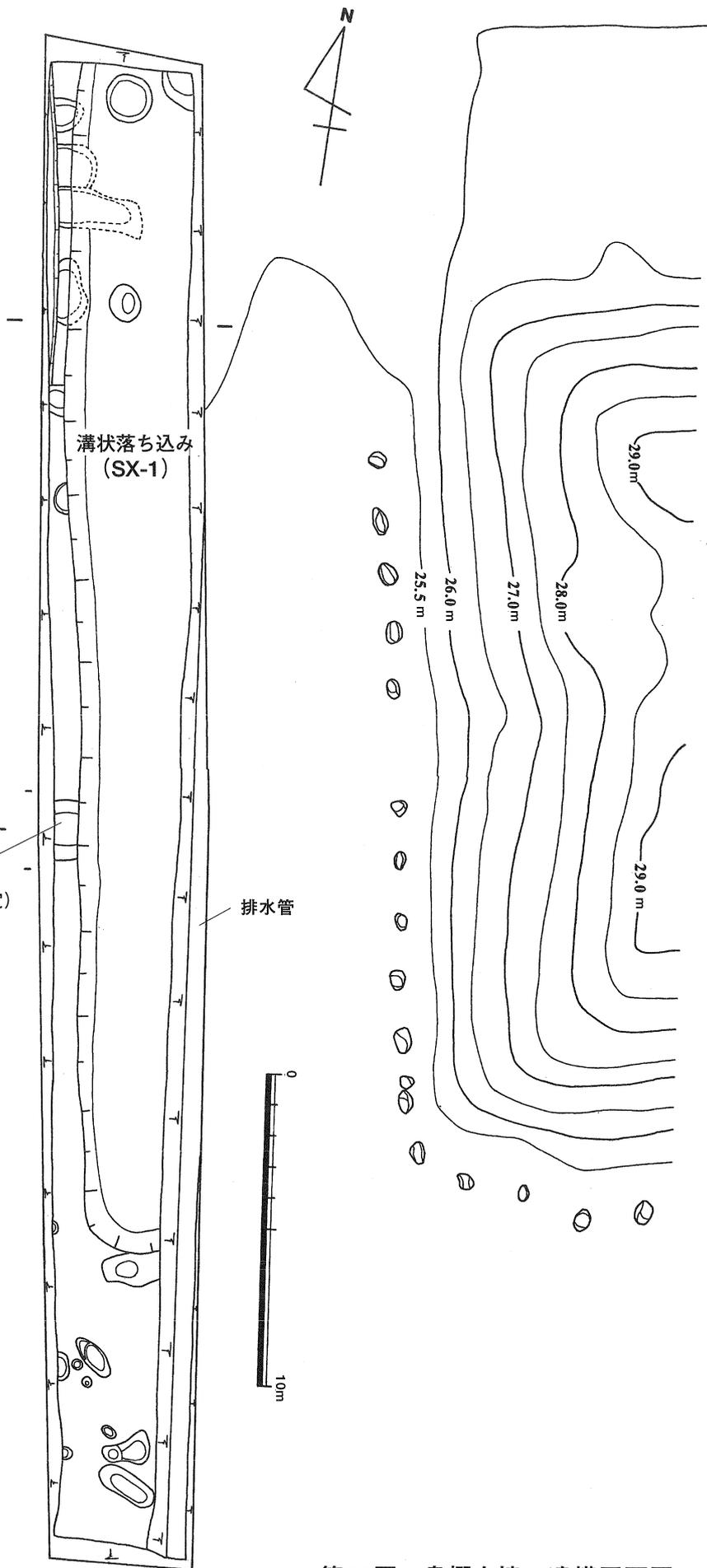
第24図 鼻摺古墳 溝状落ち込み(SX-1)
堆積状況土層断面図



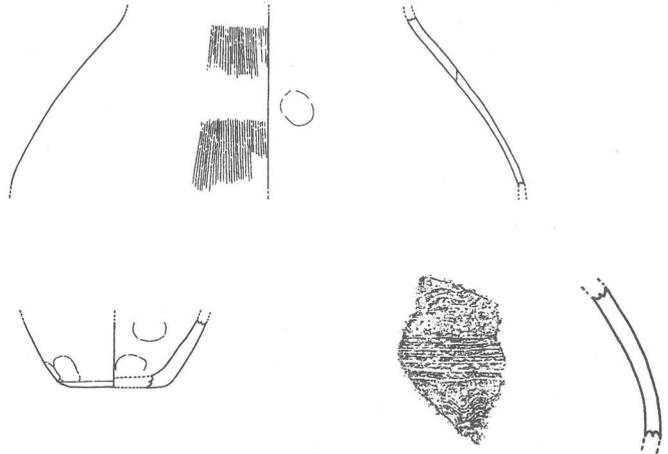
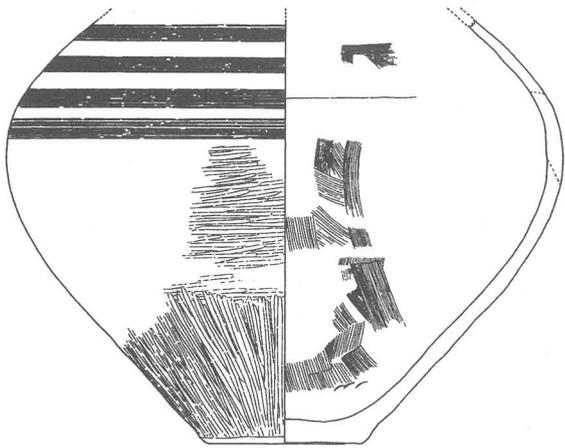
第25図 鼻摺古墳
調査区西壁土層断面図

SK-1
(平面形は推定)

- 1. 表土
 - 2. 暗灰色砂質土層
 - 3. 茶褐色砂質土層
 - 4. 暗灰色礫混土層
 - 5. 黄色礫混土層 (地山層)
 - 6. 黒褐色粘質土 (SK-1埋土)
 - 7. 灰色粘質土 (遺構埋土)
 - 8. 黒褐色粘質土 (遺構埋土)
 - 9. 黒色砂質土 (礫やや混ざる)
 - 10. 暗褐色砂質土 (大礫混ざる)
 - 11. 暗灰色砂質土 (大礫混ざる)
 - 12. 黒褐色砂質土 (礫少量含む)
- } SX-1
埋土



第26図 鼻摺古墳 遺構平面図



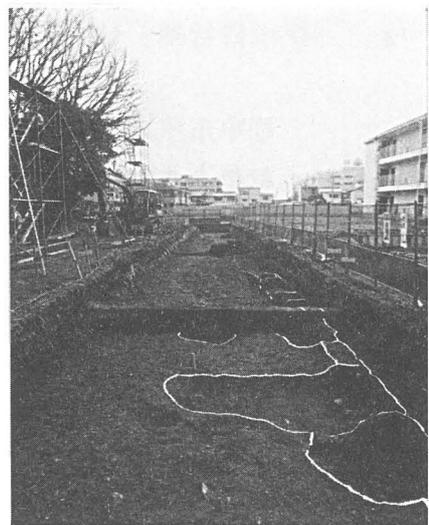
0 10cm

0 10cm

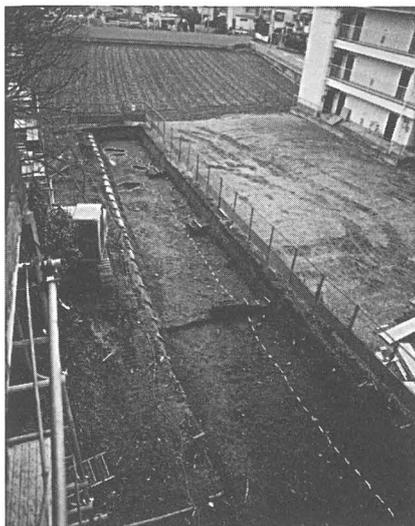
第27図 鼻摺古墳 土塚(SK-1)出土土器実測図



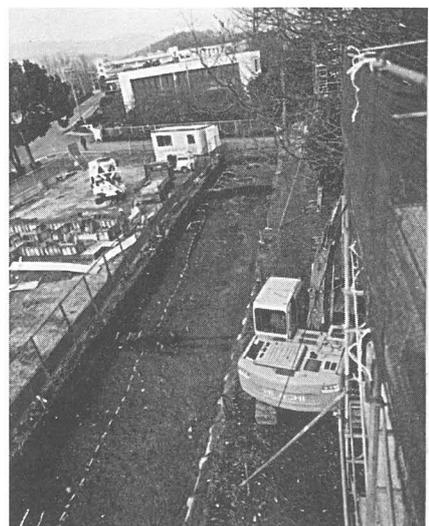
鼻摺古墳 全景 (南西から)



鼻摺古墳 調査区全景 (北から)



鼻摺古墳 調査区全景 (北東から)



鼻摺古墳 調査区全景 (南東から)

用語解説等

1. 本文中、遺構の表示記号については、奈良国立文化財研究所の用例をもとに一部調整して使用している。

S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝・河川

S E : 井戸 S H : 縦穴住居跡

S K : 土坑 S P : 石積み遺構・方形周溝墓

2. 図中の X・Y は座標値を表す。単位は km
3. 図中の T・P は標高(東京湾平均海面高度)を表す。
4. 「庄内併行期」(本文 P 18 他)

豊中市庄内遺跡から出土した土器を基準とした時期区分で、
おおよそ弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあたる。

平成12年度発掘調査概報

発行日 平成13年3月31日
発行 茨木市教育委員会
印刷所 日栄印刷紙工株式会社